

July-2008
No.34
NEWSLETTER
Kyoto International Cultural Association, Inc.

(財)京都国際文化協会

京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館116号

TEL. 075-751-8958 FAX. 075-751-9006 〒606-8305

e-mail office@kicainc.jp

URL http://kicainc.jp/

会長 西島安則 ・ 理事長 千玄室

**2007京都国際文化協会
エッセーコンテスト
《私の見た日本》**



Prize-winning Essayists and Prof. Aotani at Forum in English

第30回エッセーコンテスト（財団法人京都国際文化協会主催、独立行政法人国際交流基金京都支部・京都大学国際交流センター・京都府後援）には、日本語19編、英語42編の応募がありました。日本語の部、英語の部それぞれ選考会を開き、優秀作品として選ばれたエッセー6編の著者を京都に招き、9月23日（日）午後に京都大学百周年時計台記念館で発表会を行いました。発表とフォーラムの後、西島安則当協会会長から6名には「京都国際文化協会賞」と副賞5万円が贈られました。入賞作品は次の通りです。

日本語の部「京都国際文化協会賞」3名

「私は内部に入っても大丈夫？」

グラベンダー・クリストファー（米国）

「チームワークの心」 劉 譔（中国）

「日本の食文化」 朴 恵蘭（韓国）

英語の部「京都国際文化協会賞」3名

「顔文字とコミュニケーション」

新谷・光・アルベルト（ブラジル）

「日本—沈黙の向こう側」

シェリン・シャオバン（エジプト）

「日本：ここが私の家」

バルマ・ビシャール（インド）

入賞作品は12頁以降に全文掲載していますが、発表会の様子与各エッセーの要旨を続けてご紹介します。

KICA Essay Contest: Japanese Culture, My View

The Presentation and Forum of the 30th KICA Essay Contest was held at the Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University on Sunday, September 23rd. Three authors of the selected essays in Japanese and three in English presented their essays and then were honored and awarded the KICA Prizes and the supplementary prize of ¥50,000.

Prize-winning Essays in Japanese

"Am I Allowed Inside?" Kristofer Gravender (USA)

"Work in a Team Setting" Liu Xuan (China)

"Japanese Food Culture" Park Hae Ran (Korea)

Prize-winning Essays in English

"The 'Kaomoji' and the Human Communication"

Alberto Hikaru Shintani (Brazil)

"Japan -The Wisdom of Silence"

Sherin Elsayed Mahmoud Shaaban (Egypt)

"Japan: A Place to Call Home"

Vishal Varma (India)

The contest has been supported by the Kyoto Prefectural Government, the Japan Foundation Kyoto Office, and the Kyoto University International Center. The following are summaries of the selected essays, and the complete versions appear from page 12 on.



Prof. Nishijima Commenting on the Prize-winning Essays

第30回を迎えたコンテスト発表会の開始にあたり、西島安則会長より挨拶がありました。

「コンテストの表題は"Japanese Culture, My View"ですが、文明と文化について考える機会が最近多くなりました。文化とは、その土地に自然の中で人々が生きて、育むものと考えます。文明とは、よい生活を目指して進歩することです。しかし、昨今のグローバリズムの根底のどこかに、強い方につきたいという雰囲気があるように思います。この10年間、応募作品を読ませてもらってきましたが、『国際文化』いう考え方が深まった一方で、表面だけのつきあいでは国際じゃない。お互いの人生の今という時間を共有している者同士が、真剣に語り合おうといったテーマが出てくるようになりました。こうした動きが世界に広がっていて、人間と自然がさらにお互いに共鳴しているような『生きた地球時代』にこれから入っていく前哨じゃないかと思います。多少荒れるかもしれませんが。しかしその方向がどちらに向いているか、コンテストがそのあたりを考えるきっかけとなることを願います」。

日本語の部の優秀エッセーの著者3名は会場で見守る先生方や家族を前に、15分の持ち時間を過ぎるほど熱心に発表しました。来聴者はそれに耳を傾けながら、彼らの日本語習得への精進や周りで支えた先生方や家族の愛情に思いを馳せました。

英語の部には、急いで椅子を増やすほど大勢の大学生の参加がありました。入賞者の発表は英語で行われましたが、フォーラムでは流暢な日本語で、参加者と質疑応答しました。

表彰式後、選考委員のクレイグ・スミス京都外国語大学教授からコンテスト開催当初の功労者オーテス・ケーリ同志社大学名誉教授の次女アン・ケーリ神戸女子大学教授が紹介されました。アン先生はご自身の経験を振り返り、発表者や学生らに「違いを出発点にしてはどうでしょう。批判するのではなく、注意深く自分の立つ位置を知ることは大切です」と話されました。

最後にスミス先生から発表者へ「皆様の発表で、本日ここに互いの意見に真剣に耳を傾け、意見を持ち寄り、会話から理想が生まれる小さくて、幸福な社会が誕生しました。参加者一同、感謝します」と謝辞が贈られました。

発表会場の準備は、今年も京都外国語大学有志の皆様がお手伝いくださいました。彼らは2007年10月に開催された京都外国語大学60周年記念事業「IMAGINE PEACE ～貧困と平和」の実行委員会のメンバーであり、日本語の部終了後に、発表者や来場者に事業の一環である「アクションプラン模擬国連会議」への参加を呼びかけました。



Ms.Park.Presenting Her Essay

「私は内部に入っても大丈夫？」

グラベンダー・クリストファー

将来日本に住み、交流を通じて社会に貢献することを目標に中学から日本語を学んだクリストファーさんは、念願かないJETプログラムに合格して来日。国際交流員として働いています。日本に到着したその日から6年間、外国人が日本人社会から排除される理由をさぐり、日本人と非日本人をひとつにすることが出来る何かを見つけないと多くの時間を費やしてきました。

日本は集団社会ですが、非日本人は「外人」としてひと括りにされ、内部へは容易に入れてもらえません。では、外国人を「国際人」と呼んではどうでしょう。この言葉には、「外部」という考えが入り込む余地をなくすることが期待できます。世界の様々な国から来て、ここ日本に住む人々は、日本が国際化に向かっていく過程に参加し、大いに貢献しています。なぜなら、彼らとの交流こそが国際的なコミュニティを覗く窓だからです。日本人と非日本人が近づき、全ての人が内部と一緒に住むことが認められたら、国際社会が長年願ってきた、日本という隣人と平和で調和のとれた交流が実現するでしょう。

「チームワークの心」

劉 譔

中学生だった頃、家電製品は全てソニー製でした。教育を重視し、科学技術の発展した日本を迷わず留学先に決めました。日本語学校1年目に、ニュースで「ゆとり教育」に関心を持ちます。中国で自身、高校受験直前にゆとりある授業に制度が変わり、難しい大学入試問題を前に会場で泣く受験生を目撃した経験から、「ゆとり教育」が学力低下に繋がり、社会問題の遠因になると理解しています。小学生がいじめで自殺したニュースに衝撃を受けます。いじめる子供に協力する子供が多数いることは残念です。悪質な連帯ではないでしょうか。

山梨大学工学部へ進学して3年生前期には、取得単位数はクラス一で、成績もほぼ優でした。中国の基礎教育の威力です。もしかしたら中国で勉強したほうが良いかなと思い始めた頃、必須の実験が始まりました。予想外に大変で、進まない実験に焦っていたところ、友達が協力を申し出てくれ、進行を一緒にチェックし

ているうちに、間違いが見つかり、実験は短時間で終わりました。その時先生が、知識を高めるためだけではなく、チームワークを作る目的の実験であったと明かします。中国では、個人の能力を重視し、自力で解くことが大切であると教えられますが、日本では、協調やチームワークを指導します。個人の高い能力を総合した結果、江崎玲於奈博士や小柴昌俊博士はノーベル賞を受賞できたのでしょうか。日本はいろいろ問題を抱えながらも、チームワークを大切にするサムライが住む国でした。

「日本の食文化」

朴 恵蘭

料理研究のために来日し、大阪成蹊短期大学総合生活学科で学ぶ朴さんは、日本と韓国、ふたつの国の食文化の間に奥深い違いのあることを感じています。食事を使うお箸とお匙や、食生活における礼節について両国の食文化の相違点を紹介しています。そして朴さんがこれぞ日本料理の特性と感じるのは、季節感だと言います。豊かな食材と季節感溢れる料理法は韓国料理にはない魅力があるそうです。

現在日本は韓流ブームで、人気ドラマ「チャンギムの誓い」を通して韓国の料理や知識について紹介されることも嬉しく思っています。

ある時、朴さんが料理研究に行き詰り「隠し味」について悩んでいた時、ある楽器製作者の言葉から「食べる人の心に響く音を伝えられるような料理人」になることを決意しました。朴さんは今も、日本で自分なりの「隠し味」を見つける努力を続けています。



Ms.Park, Mr. Liu, and Mr.Gravender at Forum in Japanese



Mr. Shintani Presenting His Essay

「顔文字とコミュニケーション」

新谷・光・アルベルト

今や電子メール等の新しい通信文化が隆盛です。真のコミュニケーションには一歩足りない文字通信だと批判する気はありませんが、同じ教室で隣同士に座りながら、携帯電話でチャットをするのは行き過ぎではないでしょうか。

神戸大学文学部1年生の新谷さんは、同世代の日本の若者が携帯電話やパソコン通信で顔文字を使うことを取り上げ、身振りや声の調子や表情で意思を伝える従来のコミュニケーションが衰退し、引きこもりや自殺が問題化する昨今、人間らしい温かみを演出する顔文字の出現は文字通信の欠陥の裏返しであり、若者が意図せず顔文字で感情表現を工夫するあたりに、21世紀の新たなコミュニケーションの形が見えて、好ましいと言います。

「日本—沈黙の向こう側」

シェリン・シャオバン

政治、経済、文化の近代化に苦悩する母国エジプトを思い、岡山大学医学研究科博士課程に在籍するシャオバンさんは、他の先進諸国とは文化も歴史も異なる日本が奇跡の発展を遂げた鍵を探りたいと考えます。それには内側から日本を見るのが一番でしょう。

日本の厳しい自然や地理的環境は、農耕文化の歴史や今日の人々の暮らしに見える日本人の特質に大いに影響を与えています。集団への帰属意識や忠誠心は顕

The following are summaries provided by the authors themselves for the audience on September 23, 2007.

"The "Kaomoji" and the Human Communication"

Alberto Hikaru Shintani

The idea of the essay is to discuss briefly the lack of real human communication in the present age. It is not difficult to realize how virtual communication has been gradually replacing the irreplaceable "human communication." Without criticizing virtual communication, the essay tries to discuss the excess of its usage. To achieve this aim, the example of "kaomoji"—a very common practice in Japan—was used as an example of how young people have been trying—maybe unconsciously—to make their virtual communication as "human" and "warm" as a normal face-to-face conversation. In other words, the necessity of using symbols that can express in some way their feelings and emotions—that otherwise would be impossible to transmit through a written text—show us how inadequate these way of communications are to provide us the real and expected "human communication".

"Japan – The Wisdom of Silence" Sherin Shaaban

Burdened with my country's problems, I wanted to understand how the Japanese created their miracle with completely different cultural and historical backgrounds than most other developed countries. There is no doubt that the difficult nature and geography of Japan is reflected on the Japanese personality, seen in the history of rice cultivation or simply in people's general attitudes today. How did the Japanese manage to conquer their defeat in World War II and digest all the philosophical, cultural, and religious influences, to produce a unique moral system to rise up, declaring: "we are here to stay"? Silence is the real wisdom in Japan. The real beauty is in what could be felt, implied, or understood with the fewest words without being intrusive. The more I learn about Japan, the more I

著です。労働は豊かな暮らしを手に入れるためですが、働くこと自体が美德とされます。

日本は敗戦から目覚ましい復興をとげ、世界の哲学、文化、宗教を糧として、原爆投下後の焼け跡に一輪咲く花のように「われ、ここにあり」と内外に強い存在感を示しています。沈黙は賢明の証です。茶道では、静かに茶室のしつらいや掛け軸を愛で、一碗のお茶をいただきます。スキンシップを大切にする文化圏から来た我々は、お辞儀や微笑みがその代わりであることを知ります。日本を知るほどに、自分や自国をもっと理解できるようになりました。

「日本：ここが私の家」

バルマ・ビシャール

以前と比べ、日本に居を構える外国人の数は増加しています。ビシャールさん自身、来日して15余年が過ぎました。自身は、日本の友人や知人たちと垣根なく、付き合いができていますが、多くの外国籍市民はお客様として扱われていると考えます。

日本の文化も宗教も言語も世界から影響を受けているにもかかわらず、外国生まれの居住者は永住者として受け入れられ難い現状があります。難民受け入れ数も少なく、海外の優秀な頭脳・技能を惹きつける仕組みもありません。日本人が嫌がる単純労働にその雇用が偏っています。外国人嫌いと言うより、外国人に接する経験不足が問題なのです。友好的・多文化的交流がこれから来る移民にとっても、日本の活性化という意味においても望ましいのではないのでしょうか。



Prof. Smith Giving Closing Words

learn about myself and about my people. To see through one has to see from within. Beyond the shown one shall see, beyond the said one shall hear.

"Japan: A Place to Call Home"

Vishal Varma

More foreigners are calling Japan their home than ever before. I am one of them. I feel privileged to have lived in this country for over 15 years. Even though I am accepted as an equal by friends and people in my community, most foreigners are treated as "guests" in this country. Japanese culture, religion and language have been influenced by Asian and Western cultures; however, Japan still finds it hard to accept foreign-born immigrants as permanent residents of this nation. Japan takes in few refugees, allows in only low-skilled laborers to do the work that most Japanese refuse, and has few policies to attract high-skilled workers to come live here. Japan is not xenophobic; it just lacks experiences on how to deal with people who don't look like the majority of its residents. A more welcoming multicultural Japan will be more vibrant and benefit not only new immigrants but also the Japanese as well.

Professor Smith, the member of the selection committee, gave closing words to the authors of the best six essays.

"Thank you to six special people. Your essays and your speeches have created a small community here in this place today. Small communities are happy when their members listen to each other, when everyone has voice, when communication creates idealism, compassion, and responsibility. Thank you for bringing us together today. KICA's gift today is opportunity. A proverb teaches 'opportunity knocks'. That's all. 'Opportunity knocks'. We must open the door and welcome opportunity into our lives. KICA today we heard the knock, six knocks. Thank you."

Please visit our site for the details concerning 2008 KICA Essay Contest: Japanese Culture, My View.

国際文化講座≪KICAセミナー≫

KICAセミナーは、今年度から（株）にはんごの凡人社の協力を得て年間6回、日本語教育と異文化間理解の分野から講師を招き、日本語教育の教材紹介、教授法の実践、異文化間理解の実践などについて指導を受け、参加者が日本語教育について具体的に学び、互いの交流を深めることができるようになりました。現場の先生方の実践的で示唆に富み、明日からの授業に活かせる講演は、「面白かった」、「充実感があった」と好評で、毎回およそ30人の方が熱心に参加してくださいました。

第1回 2007年7月21日（土）14:00-16:00

演 題 「これも日本語教育」

講 師 松田浩志先生

プール学院大学国際文化学部

松田先生は学生たちと共にアジアの国々を訪れ、行く先々で合宿しながら、学生たちは子ども達と交流します。日本語を教えたり、子ども達と一緒に食事作りを楽しんだり。一番の呼び物は野球です。大阪の協力者に集めてもらった中古の野球道具。見たこともないネパールの子供達は遠巻きに。でも、頑張りました。みんな野球が大好きになりました。先生の異文化間理解の実践はいつも行く先々の子ども達の目をきらきらさせるものです。

第2回 2007年9月15日（日）14:00-16:30

演 題 初級からの日本語スピーチ

—そのコンセプトと使用法—

講師 熊野七絵先生

国際交流基金関西国際センター

日本語教育専門員

熊野先生は初級学習者であっても知的な話題について書き、それを口頭で表現できるようにとの配慮から作成された教科書について語ってくださいました。作文指導、スピーチ指導にすぐ役立てることのできるお話でした。

第3回 2007年11月17日（土）14:00-16:00

演 題 『みんなの日本語』を使って教える

講 師 田中よね先生

神戸大学留学生センター非常勤講師

世界中で広く使われているこの教科書の執筆協力者、田中よね先生からその使い方を直接教えていただきました。目から鱗！という参加者も。この教科書に込められた執筆協力の先生方のご努力と思いは短い時間では伺い切れないものでした。

第4回 2007年12月22日（土）10:00-12:00

演 題 「これまでの授業パターンをくずす新しい
初級教科書『J.Bridge for Beginners』

—そのコンセプトと使用法について—

講 師 小山悟先生

九州大学留学生センター准教授

「トピックという大きな枠組みの中で視点を変え、新たな学習項目を加えて別のタスクを与える。そうすることで、学習者の目先を変えつつ、同じ文法や語彙を繰り返し練習する。」小山先生は「初級教育の新しいモデル」について熱く語ってくださいました。その時、先生の頭の中は、早くも次の企画で一杯！



小山悟先生

第5回 2008年1月26日(土) 10:00-12:00
演題 「相手と状況に合わせた会話能力を養成するために」
講師 宮谷敦美先生
愛知県立大学外国語学部准教授

宮谷先生は、初級～中級レベルの会話クラスで、状況に応じた話し方を伸ばすために教師が気をつけるべき点を挙げ、聴解教材・会話教材の効果的な使用法をご紹介します。



宮谷敦美先生

「ウォータールー大学から京都大学へ」

2007年も暮れようとしている頃でした。カナダのウォータールー大学レニソン校の「Study Abroad in Japan」の一行が協定校の京都大学工学部を2週間に渡り訪問することになり、午前の日本語のクラスと午後の日本文化のクラスはKICAが協力参加することになりました。

プログラム参加の学生さんは男子5人、女子6人でしたが、カナダでの日本語既習時間が一定ではなく、カナダ全土の日本語スピーチコンテストに出場した人もいれば、ようやく、ひらがなが読めるようになった人も、という状態でしたので、11人全ての学生さんに満足して貰えそうな教案を準備することは易しいことではありませんでした。3月初旬からミーティングを重ねましたが、不安を抱えたまま、到着の日を迎えました。5月13日、カナダでの日本語の先生、関田先生に引率された一行が到着。それは驚くほど礼儀正しいグループでした。旅の疲れも見せず、初めての日本に、そして京都に興味津々。

第6回 平成20年3月22日(土) 10:00-12:00
演題 「授業で活かす学習活動例」
講師 栗原幸則先生
国際交流基金関西国際センター
日本語教育専門員

栗原先生の講義は初めから参加型。既習文型・語彙を使っの質問作りを課されて、参加者一同その難しさを再認識。「みんなの日本語I 400のしつもん」というお土産もいただきました。即使えます！

EASIA 250: Study Abroad in Japan

The Faculty of Engineering, Kyoto University was to officially host the students of its exchange school, Renison College, University of Waterloo, Canada. They were to come to Kyoto as part of the "Study Abroad in Japan" program in May 2008. KICA was recommended to collaborate in this program teaching Japanese and Japanese Culture.

It was in early March that KICA staff started to prepare teaching plans for the program. There was a lot of anxiety because eleven students in the program were expected to vary in their proficiency of Japanese. The worries, however, disappeared as soon as the staff first met the eleven students—six female students and five male students—led by Ms. Misato Sekita. They were extremely bright and polite and



Students with Ms. Sekita and Ms. Kaida on Yoshida Campus

5月15日、京大の吉田キャンパスの一室で、午前の日本語クラスが始まりました。レベルの異なる学生さんたちでしたが、関田先生、そして、ウォータールー大学に留学していた京大生の助けも得て、授業を進めることができました。「日本に滞在中は、出来る限り日本語のシャワーの中で」というのが当初からの希望でしたので、全て日本語で通しました。

ほとんどの学生さんが日本のマンガ文化やIT文化に惹かれて日本に興味を持つようになったことは周知のことですが、ここは京都。午後の日程は、京都でしかできないものを組みました。葵祭り、平安神宮、清水寺、八坂神社、そして伏見稲荷大社などの社寺見学はもとより、任天堂の時雨殿や映画村など、時間の許す限り訪れました。京大合気道部の練習に参加、梨木神社ではキモノ体験、法然院では茶会を、そして箏の実習、最後はスタッフの家庭を訪問してちらし寿司を作るなどの実習も。

このプログラムにはカナダでの「単位」が認められていることから実施した「期末テスト」を終えた一行は、名古屋、小田原、そして東京を目指して、新幹線の客となりました。すでにウォータールー大学に留学して友情を深めていた京大生と一行の京都での再会は、傍目にもうるわしいものでした。忙しくも楽しい2週間でした。一行のブログ「KyotoNI」をご覧ください。

[<http://kyotoni.wordpress.com/>]



With the Aikido Club Members, Kyoto University



Japanese Class Scene

fully interested in Japan and its culture, both ancient and modern.

The class started on May 15th in a cozy classroom on the Yoshida campus of Kyoto University for two weeks. All the morning classes were conducted mostly in Japanese with the help of Ms. Sekita and Kyoto University students, who had been to Waterloo University as exchange students, when necessary.

Everyday in the afternoon, the KICA staff took the students to the places of interest including Aoi Festival, Flea Market at the Chion-ji, Heian Shrine, Nishiki Market, Uzumasa Eigamura, Shigureden of Nintendo, Kiyomizu-dera, Maruyama-koen, Gekkeikan Okura Sake Museum and Fushimi-Inari Shrine. The students also enjoyed some hands-on experiences of being thrown by the experts of Kyoto University Aikido Club, wearing Kimono at the Nashinoki Shrine,



Visiting the Arashiyama area



International Tea Gathering

国際茶会

第27回「国際茶会」が10月20日（土）裏千家茶道会館において開かれました。初席では西島安則当協会会長から裏千家に謝辞が述べられ、さらに、千玄室氏が半世紀にわたって「一椀の中に平和を」と世界中に茶道の心髄を説いて回られたことを、内外各地からの参加者に紹介されました。

引き続き、40カ国からのお客様300余名が順次、三席の茶室に招かれ心尽くしのお菓子とお茶をいただき、ひととき静かな交流を楽しみました。ほとんどのお客様には初めての体験であったとか。別棟の茶道資料館では折しも宗旦三百五十年忌記念秋季特別展「千宗旦」が開催されていて、参加者に好評でした。

第27回国際茶会は（財）今日庵・（社）茶道裏千家淡交会・（財）国際茶道文化協会・（財）京都国際文化協会主催、（財）京都府国際センター、（財）京都市国際交流協会後援により開催されました。

外国人留学生交流プログラム

京都で学ぶ留学生とその家族のために、千玄室理事長の支援を得て、伝統芸能の鑑賞や料理を通じての交流、日本語学習の支援などを行っています。

日本語学習支援は、有資格教師による従来の「日本語個人・小グループレッスン」に加えて、ワンコイン

sipping a bowl of tea at the Honen-in Temple, playing Koto at Ms. Asano's and finally, cooking SUSHI at Ms. Kaida's home.

Having finished the "final tests" on May 28, Ms. Sekita and her students left Kyoto for Nagoya, Odawara and Tokyo to explore other phases of Japan. It was so pleasant for all involved to know that young students from Canada were truly interested in Japan and its culture, and that they fully enjoyed the reunion with Kyoto University students and formed mutual friendship in wonderful ways. Please visit their blog if interested of: [<http://kyotoni.wordpress.com/>]

International Tea Gathering

On Saturday, October 20th, the 27th Annual International Tea Gathering was held at the Sado Kaikan, Urasenke. Professor Yasunori Nishijima, Chairman of KICA, greeted the guests from home and abroad. He praised that the Grand Tea Master Dr. Genshitsu Sen, for his visiting a large number of countries and introducing the quintessence of The Way of Tea which goes "Peace in a Bowl of Tea" since his young days.

More than three hundred guests from over 40 countries were invited to three different tearooms, clean and tranquil, and were served a bowl of tea and a sweet there. Though it was the first experience for most of the guests, everybody seemed relaxed and happy. They also enjoyed the old and rare tea utensils exhibited at the Chado Research Center on the Urasenke Complex.

International Tea Gathering is co-sponsored by KICA and UIA, and is supported by the Urasenke Foundation.

Program for Students and their Families from Abroad

This program, supported by Dr. Genshitsu Sen, offers Private/Small Group Lesson in Japanese, Advising for everyday life issues, Theatergoing for Kabuki and Bunraku, and Joy of Cooking with Students from Abroad.

Are you looking for a place to learn Japanese? Yes,

で学べるクラスを創設しました。当協会主催の日本語教師養成講座修了生に教師登録を呼びかける一方、協会ホームページで日本語・英語・中国語・韓国語で日本語学習希望者に向けて、「ボランティア教師による日本語クラス」の案内をしています。ご興味のある方は協会までお問い合わせください。

＜ボランティア教師による日本語クラス＞

場所：京大会館116号室または会館近くの教室

費用：1回90分で500円

学習内容・教材・時間帯は、学習者と相談します。

国際交流講座＜日本語を学ぶ人のために＞

「やさしい日本語」教室（京都市国際交流協会主催、当協会共催）で07年度第4期を担当された山本祐見さんのクラス便りをご紹介します。

＊

今年も日本に帰国中、「やさしい日本語」を2ヶ月間担当させていただく機会に恵まれました。今回は受講生の国も来日の目的も極端に異なり、逆に遣り甲斐がありました。初級クラスにはいつも独特の緊張感が漂います。来日して僅か数週間という方々がまだ日本や日本語に関して殆ど知識も無く、新鮮な気持ちでコースに挑まれる様子は、指導するこちら側にも刺激になり気持ちの引き締まる思いです。私自身も9年前ドイツに渡りました際は、新しい事を学ぶ際に伴う期待と緊張感を持って挑みたいと、昔大学で学んだドイツ語の知識は無いものとして、ドイツ語コースを初級から受講しました。私が受講したコースは過酷でしたが、プロ中のプロから教わる授業での教授法はその後の私の日本語の授業にも少なからず影響を与えたと思います。それが現在の年に1度の日本での授業に良い方向で反映されていればと願っております。

やさしい日本語Ⅰ（A）毎週金曜日 13:00-15:00

（B）同 18:30-20:30

やさしい日本語Ⅱ 毎週木曜日 18:30-20:30

場所：京都市国際交流会館、費用：3,000円（12回）

問合せ：KICH (075-752-3511)

又は当協会（075-751-8958）まで。

we are here! We think you will find KICA's tailor-made course of Japanese by either licensed teachers or voluntary instructors fun and useful. For further information, please contact us.

Japanese Language Classes for Beginners at KICH

I was given another opportunity to teach "The First Step in Japanese" while I was spending two months back in Kyoto from Germany. It was challenging for me to find that students in the class were from different cultures and they differed widely in their motivations to study Japanese. This basic class is usually filled with tense atmosphere, probably as they are newcomers and know little about Kyoto and its people and language. This stimulates me a lot to do a better job every year.

The reason why I chose to take a very basic course of German when I first went to Germany nine years ago, though I majored in German in Japan, was I wanted to challenge this particular feeling of tense and anticipation. Though the course was harsh and difficult, the teaching methods used by excellent professors influenced me a lot and still keeps motivating me to teach this class in Japan once a year. (Yumi Yamamoto)

KICH and KICA co-organize Classes in Japanese language for the newcomers. Each course (12weeks) starts in April, July, October and January.

●Schedule:

The First Step in Japanese

(A) Every Friday 13:00-15:00

(B) Every Friday 18:30-20:30

The Second Step in Japanese

Every Thursday 18:00-20:30

●Place: Kyoto City International Community House

●Fees: ¥3,000/12weeks

For further information, call KICH (075-752-3511)

or KICA (075-751-8958)

国際交流講座〈日本語を教える人のために〉

国際交流講座では、日本語を一つの外国語として教える日本語教育の基本を教授し、受講者が国の内外で日本語学習者、来日留学生および研究者とその家族、或は帰国子女等の日本語学習を指導できることをその目標としています。2007年度修了生の水野あづささんから受講の動機と感想をご寄稿いただきました。

*

～講座「日本語を教える人のために」を受講して～

日本語を教えるとは ということなのか。そもそも日本語とは？ しっかり考えてみようと思いながら講義に臨みました。今、先端で日本語・日本語教育を研究されている、あるいは 現場において日々問題に向きあっていらっしゃる先生方の講義に接することができました。言語教育の多角的な捉え方、外国の人にとって日本語修得の困難な点等等、わかっているようでわかっていなかった自分に気づき、使命のようなものを感じました。世界がひとつになってゆくからこそまずは母語である日本語を 地球の一言語として大切に見つめなおし、誠実に伝えてゆかねばならないと自覚した一年間でした。

実践講座「美しい日本語を話す」

大阪・神戸のNHK文化センターで視覚障害者のための朗読ボランティアの養成に力を注いでこられた林曠子先生を講師に迎え、日本語を教える人のための実践的なセミナー「美しい日本語を話す」が5回シリーズで開かれました。正確で分かりやすい話し方を目指して、腹式呼吸による発声に始まり、個々の50音の発声、さらに発音しにくい文を読むことまで。受講者一人一人が心地よい緊張感をもって基礎訓練に取り組みました。この訓練は必ずや日本語教育の現場で役立つことと思われます。受講者の要望に応じて、引き続き2008年度も、林先生による「美しい日本語を話す2」が開かれました。このシリーズでは関西人の多くが苦手とする共通語のアクセントに重点が置かれています。

2008年度講座カレンダー

国際交流講座

——日本語を教える人のために

	2008	講座Ⅰ — 日本語を知るために	
1	4・15	日本語の世界	玉村文郎
2	22	ことばのしくみ	吉田和彦
3	5・13	発音・アクセント	壇辻正剛
4	20	日本語の文法	加藤久雄
5	27	日本語の文字・表記	大島中正
6	6・3	敬語とやりもらいの表現	浅野敏彦
7	10	国語教育と日本語教育	糸井通浩
8	17	海外の日本語教育	中野佳代子
9	24	日本語の語彙	玉村文郎
10	7・1	日本語教育の術語の解説	玉村文郎
	2008	講座Ⅱ — 日本語を教えるために	
1	9・9	日本語の言語行動	金田一秀穂
2	16	誤用例研究	玉村禎郎
3	30	文型の指導	鈴木睦
4	10・7	日本語と英語の対照	影山太郎
5	14	日本語と中国語の対照	名和又介
6	21	日本語と韓国語の対照	泉文明
7	28	入門期・初級の指導	吉田恵子
8	11・4	音声の指導	土岐哲
9	11	日本語教授法	松井嘉和
10	18	日本語教育と辞書・辞典	玉村文郎
	2009	講座Ⅲ — 日本語を考えるために	
1	1・13	日本語教育史と日本語教育事情	玉村文郎
2	20	言語と認知	山梨正明
3	27	日本語と日本文化	前田富祺
4	2・3	コミュニケーション・ギャップ	乙政潤
5	10	日本語と日本社会	真田信治
6	17	外から見た日本語・日本文化	K.シュベネマン
7	24	国際交流と日本語教育	未定

会場：京大会館

日時：毎回火曜日 6:30～8:30 p.m.

協会年会費：¥5,000

受講料：講座Ⅰ ¥20,000 Ⅱ ¥20,000 Ⅲ ¥14,000

私は内部に入っても大丈夫？



グラベンダー・クリストファー

12才の時から、ずっと日本に住みたいと思っていました。それは、単なる夢では無く、情熱でした。そのため、中学校時代から日本語の勉強を始め、続けて高校でも勉強しました。高校時代、先生が夏休みに日本への旅行を計画していると知り、期待に胸を膨らませたのを覚えています。しかし、他の生徒は興味が無く、結果として旅行はキャンセルになってしまい落胆したのを覚えています。母に武道を勉強したいと頼み続け、20才になってようやく武道を習うことを許されました。そして、大学在学中にも日本語の勉強と両立しつつ、時間のあるときなどに武道に励みました。

大学の卒業とともに教員免許を取得し、JET PROGRAMME（ジェットプログラム）に合格して福島県会津若松市に行くことが決まったときの私の喜びを想像してください。日本の文化や歴史、言語などを勉強した甲斐あって日本で隣人と交流ができる、と想像しただけで本当に嬉しくなりました。言うまでもなく、日本での仕事が教員免許を取ったばかりの私の、初めての仕事でした。喜びと緊張を胸に抱き、日本の中学校での仕事を始めることとなりました。

ですが、私は最初の一年目から、理想として描いていた日本の生活とはまったく違った様なことが、当初、感じていた興奮や楽しみという気持ちを、次第に不満や後悔にという気持ちに変えていったことに気がつきました。それら私が経験した多くのことは、他の国々では差別（ある文化を他の文化から完全に別離させること）として見なされていることでも、日本では普通に受け入れられているのです。このようなことが、本当の意味で私が日本の“内部”に住むということを許さなかったのだと思います。

いくつかの違いは、すべての非日本人にあたりまえのように起こるため、ほとんど目に見えません。例を

挙げると、私の隣人の「箸の使い方を知っていますか？」や「寿司を食べることができますか？」といった驚きを含んだ質問や、おそらくは励ましの言葉である「あなたの日本語は、上手ですね」といった一言です。「外人は日本の生活に馴染むことができないと思っていた」と言われたことや、私が日本人と同じように、日本人らしいやり方で生活することができるということに驚かれるまで、隣人がそのような質問をするのは彼らが私のような外国人と交流した経験がないからだろうと感じていました。

目に見える違いもありました。

日本で生活していたある時、学校の教員会議に参加しようと試みました。しかし、私の参加は認められず、その理由というのが私は学校の正式な教員ではなく、教育委員会の職員だからというものでした。しかしながら、私は当時、ほとんどの勤務時間を学校で過ごし、教育委員会には月に一度しか出勤していませんでした。

他の教員と飲みに行ったある夜、仲良くなった一人に「会議に参加したいな」と言いました。彼は親しげに私の肩に手を置き、「会議は退屈だから、教育委員会のことを言い訳にして会議には出席しないほうがいいよ」と笑いながら返事をしました。その後すぐに、お酒を片手に持った先生が会話に割り込んできて、私が会議に出席したとしても、手助けにはならない、と言ってきました。彼の言い分として、私はアメリカの教員免許を取得しているものの、日本の免許は持っていないので、私が日本の教育についてよくわかっていないからだ、ということでした。また、その先生は外国人が会議の場にいるとグループの“和”を乱すからだ、とも言いました。彼の意見は、こっそりと我々の会話に聞き耳を立てていた副校長の支持をも得ました。仲の良かった先生に助けを求めましたが、彼は首を垂れ、罪悪感を感じていたのか、私に背を向けていました。

その出来事は、私にショックを与えました。約一年の間一緒に仕事をし、当初、私が“単に英語を教える仕事に就いた外人”ではなく、実際の教員という事実喜びを表し両手を広げて歓迎してくれた彼らが、密かに私に対して「日本人ではないので日本の学校のことが分かるわけがない」という“本音”を隠していたのです。残念ながら、彼らの示した“建前”と“本音”の例は、「日本人ではない人間は日本文化を理解することが不可能であり、よって彼らは日本社会にとって利益がない」という、広く社会に浸透した意識を垣間見せてくれました。

日本では、“建前”が人との和を維持していくために使われることは知っていました。たとえ、建前を使うことがアメリカでは無礼に値し、すべての関係を終わらせてしまう理由になり得るとしても、自分に「私は、今日本にいる。そして建前を使うことは、ここではあたりまえなのだ」と言い聞かせていました。しかしながら、建前が日本文化の一部だとしても、あの夜起こった“建前”事件によって、私はここには属していない人間ではないか、といった疎外感を同僚から感じるようになりました。また、自分が何か彼らを動揺させるようなことを言ったのかと思い、その反面、会津以外の地域では“建前”はそんなに使われていないのではと思いました。

4年目に、別のJETの仕事で会津の外に引越しをしました。その仕事には、私の他に近くの町に住み、経験豊富で熱意のある素晴らしい女性の教員も応募していましたが、正直、私が選ばれたことは驚きでした。その仕事を始めてすぐに、どうして彼女ではなく私が選ばれたのかということを、上司に尋ねましたが、彼が言うには、そのオーストラリア出身の女性教員は頻繁に飲酒をし、露出度の高い洋服を着ていたため、町に、そして特に教育委員会に恥をかかせたからだという理由でした。よって、町では今後オーストラリア人および、出身国は関係なく外国人女性教員は雇用しないという決定を下したそうです。

私は、たった一人の一度の無責任な行動が、ある文化の全体のイメージを破壊してしまったことに大変驚かされました。町は、外国人女性教員という姿を、一個人の行いを元として作り上げてしまい、そのせいで

他の関係ない多くの人間も、町（の社会）から除外されることとなってしまったのです。また、このことは私が日本生活の最初の三年間で経験したことに類似していると気づきました。言い換えると、これらの出来事は、日本人ではない人種を日本文化の“内部”に入り込ませないのが最善だという、圧倒的な考えを表しているように見えました。

日本は集団社会です。日本について勉強し、ここに住んだことがある人なら、集団に属するということは日本文化の本質であり、人々はこのグループに属しているかによって区別されると思うでしょう。日本で、初対面の人に会って自己紹介する場合、ただ単に名前を言うことは絶対にせず、「～所属の/出身の～です」といった紹介をしたいと思います。すなわち、名前だけでその人を判断するのではなく、どこの会社でどんな役職に就いているかといった要素によりその人を見極めようとします。この考えは、日本に住む非日本人には適用されていません。なぜならば、私たちはすでに“外人”という集団に入れられてしまっているからです。そして、日本に存在する他の集団と同じように、誰であろうが関係なく、その集団に属する一個人が、集団全体の代表となってしまう時があります。

最近、北海道で起きたミートホープ社の問題は、この事柄を表す良い例だと言えるでしょう。現在、問題の会社の代表である田中社長は、人々を騙し、不正を行いそして偽りを述べたと社会では見られていますが、彼が会社の代表である以上、その会社で働くすべての人は彼と同じように見られています。しかしながら、あなたがもし、毎日汗水たらして働き、社則に従い、会社のために最善のことをしてきたミートホープ社の従業員の一人だったとしたらどうでしょう？ 会社で一体何が起きているのか、まったく見当がつかなかったというのに、田中氏の下で働いていたという理由だけで見知らぬ人から嘘つき呼ばわりされたらどう感じますか？

最近、インターネットで不動産を購入し、家族のために家を建築したいと願っていた静岡県男性についての記事を読みました。しかしながら、その購入予定地がある地域に住む住民が、男性がブラジル人の血が入っているという理由で、彼が夢を実現させるのを阻

止しました。住民の言い分は、もしも彼らが男性がそこに家を建てるのを承認すれば、「近所に犯罪を呼び寄せてしまうことになる」と恐れたからです。男性が、怒りを鎮めるために住民と話をしようと試みましたが、住民たちは会話には応じず、彼らの土地と生活からその男性を完全に追い払ってしまったのです。住民たちは、日本で罪を犯し、国へと逃げていった幾人かのブラジル人の姿を、その男性の姿と重ね合わせてしまったのです。ここは日本であり、そして彼は完全な日本人ではなかったために、彼は自動的に“非日本人グループ”、さらに正確には“ブラジル人グループ”に放り込まれてしまったのです。たとえその男性が、罪を犯し母国へ逃げていったうちの一人ではないにしても、幾人かの日本人が彼を“ブラジル人グループ”のメンバーだと位置づけたため、彼は排除されてしまったのです (*Racism*)。

皮肉なことに、1999年に実際に国へ逃げ帰ったある男性は、「彼は日本における差別を恐れて逃げた。日本人の血を引く外人の出稼ぎ労働者は、激しく差別されているからだ」ということでした。(*Jordan*)

国際化に向かうのを強く願っているこの日本で、日本人ではないからという理由だけで、外国人が排除されるのは想像しがたいことです。しかしながら、このような出来事は日本国内で頻繁に起こるものでなく、日本人と外国人が調和を守りつつ一緒に生活している例は数多くあります。

静岡県、磐田市の地域活動では、当初、地元のルールや礼儀に従わない外国人が流れ込んでくるのを憂慮していました。しかし、外国人の居住を禁止する代わりに、地域活動の運営を外部に開き、元来の日本的な考えと共に国際的なアイデアや感覚を取り入れるようにしました。加えて、外国人の住民に地震が起きたときなどの緊急避難訓練、応急処置法を教え、また祭りやスポーツイベントなどで、指導者としての役割を果たすことも認めました。(*AROUND*)

名古屋では、様々な産業に多くの外国人労働者が流入したため、日本語以外の言語での行政サービスが必要となりました。しかも、そういった多言語でのサービス提供だけではなく、豊明市などでは愛知教育大学

の生徒が、ボランティアで就学児童に日本語を教えています。(*NAGOYA*)

また、多言語での相談、外国人のための日本語教室、地元コミュニティに国際化について教えるお祭りやイベント、日本人及び外国籍の人々にその他無数のサービス提供を行う様々な国際交流協会が日本中にあります。

しかしながら、“国際人居住者”の受入に伴うサービスが増加してきているとしても、反対に国の焦点が、“国際人居住者”を排除する方向に移行しつつあるという問題があります。最近の例として挙げられるのは、留学生を複数のスポーツ大会から締め出そうとする動きです。これは全国高校駅伝の見物人が、学校が優れた“外人”の走者を駅伝大会の第一区を走らせていることに対して苦情を言ったために起こりました。外国人の走者が第一区を走ることにより、日本人選手がテレビに映らなくなり、大会がつまらないものとなってしまったというのです。その苦情は、卓球やバスケットボールなどの競技をする外国人学生までもが対象となり、結果として、駅伝において外国人選手に対する規制、外国人バスケットボール選手の試合出場の規制、そして、サッカーでは複数の外国人選手が試合中、同じフィールドに立てなくなりました。

朝日英字新聞は、まるで「高校体育連盟のスローガンは “もしも彼ら（外国人選手）に勝てないのなら、彼らの出場を禁止しよう”」だという引用を使い、この差別に対してコメントを発しました。(*Groups*)。

現在の、国際交流協会での仕事の一部として、1ヵ月に一度、幹事会に出席しなくてはなりません。たとえ国際交流協会という名前でも、幹事会には非日本人はおらず、たった一人の外国人である私の意見や考えは、私の同僚だけではなく、幹事会のメンバーにも発言するのを思いとどまるよう言われました。最近、幹事の一人に、非日本人は「意見を強く言い過ぎる」と言われ、それはグループの和を乱すこととなるので、避けるべきだと告げられました。

最近人気が出たお笑いのタカアンドトシは、最後の例です。彼らの漫才芸の流れとして、タカが予想外の

行動をして、賢い相方であるトシに頭を叩かれます。彼らの人気が発火したのは、タカの“間違っただけ”行動は、日本では、アメリカ・イギリス人や彼らに関係することを表す“欧米”を現しているからです。簡単に言えば、タカは“欧米”的な行動をし、相方のトシに、それは日本人らしくないといって頭を叩かれます。彼らは、現在日本でもっとも人気のあるお笑いコンビの一組であり、日本中の子供たちが“ばか”な人々を呼ぶのに“欧米化”という単語を使うようになったことに一役買っています。

訪日する前、私はこの社会の役に立ちたいと思い、多大な時間を日本について勉強し学ぶことに費やしました。しかしながら、日本に到着したその日から、外国人が排除される根本的な理由を探し、どうにかして日本人と非日本人を一つにすることが出来る何かを発見できないかと願うことに、さらに多くの時間を使ったことを覚えています。

最初のJETの仕事をしていた時、地元の公民館で大人のための英会話教室を教えることになりました。ある男性は、“外人”という単語の使用に対して毅然とした態度を持っていました。彼は、日本人ではない人に対して、その言葉は否定的で軽蔑的な意味を含蓄していると信じていたからです。その代わり、彼は“外国人”という言葉が好きで使いました。日常的にすべての日本人によって使われる、その二つの言葉に対する彼の強い信念は、私にその二つの言葉が、非日本人に対するこの国の認知・理解にどのような影響を与えているか、という課題に答えを与えました。

外人と外国人という二つの単語は、どちらも“外”の漢字から始まります。集団の“内部”に属するということが社会全体の成功に必要な、この国の文化の中では、“外部”のグループが存在するということは、ぞっとすることであり、さらにぞっとするのは、そのグループは、非日本人によって構成されているという事実です。徳川時代、日本は他国に門を閉ざしていたため、集団に属するということは“生活”することでした。徳川時代から約140年経ちますが、意図的なのかそうではないのか、まだ日本には外の世界や他国から日本にやって来た人々と自身を隔離するという、140年前と同じ考え方を持つ人間が大勢います。

この国の多くの非日本人が、優れた教育システム、美しい自然、非常に低い犯罪発生率、そして人々が調和の中に共存できるという理由でこの国にやって来ます。しかしながら、その要素は、私たち非日本人が本来の意味で国の“内部”に住むことを許されないのであれば、経験できないことでしょう。多くの人々が日本に渡り、税を払い、一生懸命働き、そしてすべての隣人と仲良く交流を深めています、その数は年々増加しています。彼らは、日本の“内部”に住み、日本の学校、会社、他のビジネスの“内部”で働き、文化の“内部”に住むことができるよう、努力をしています。しかし、それでもなお徳川時代からの排他的な考え方のせいか、それとも非日本人グループのイメージを破壊し、悪くする少数の無責任な人々のせいなのか、日本社会の前進のため懸命に役割を果たしている非日本人は、まだ“よそ者”と考えられています。

言葉には驚くべき力があります。人の心を変えること、戦争を始めること、平和にすること、失恋・絶望を癒すこと、そして、差別を永続させることすら可能です。二十一世紀の日本には“外国人”という言葉ではなく、“国際人”という新しい言葉が必要だと信じています。どちらの言葉の意味も、その人が日本人ではないという考えを含んでいますが、しかしながら“国際人”という新しい名前は、“外部”という考え方が一般に普及するのを阻止するでしょう。また、日本人ではない人々が日本文化、そして日本の民衆の心や、考え方の中に入っていくことを認めていくと思います。

現在の仕事において発見し始めたことは、世界のあちこちから来日し、ここに住んでいる人々というのは日本が国際化に向かっていく過程に参加しているということです。なぜなら、多くの日本人にとって、彼らとの交流だけが国際的なコミュニティを覗くことのできる窓だからです。しかしながら、私たちが交流しようとするどの人の考えの中にも、もうすでに外国人を別離するという考えが存在しているので、私たちに“外部の人”というラベルを貼ってしまうことは、交流をさらに難しいものとしてしまいます。国際化に向かう過程で、日本人が実を結ぶ助けをするには“国際的”にならなくてはなりません。

私としては、先述の静岡県の男性がもしも“外部”の人間ではなかったら、日本人の新しい隣人の家の隣

に彼の家を建てることができたでしょう。もしも、非日本人というラベルが外国人選手に貼られていなければ、彼らが高校でスポーツをすることに、こんなにも不満の声が上がったのでしょうか。もしも我々が“よそ者”ではなく“国際人”として認識されていたら、私たち非日本人は“外人”として見られることはなく、日本の一部として日本人の友達とともに生活や仕事をするのが可能でしょう。さらに、もしも多くの日本人が“国際的”になると、どうなるでしょう？ 結果として、日本人と非日本人を近づけさせ、すべての人が“内部”と一緒に住むことが認められるのでしょうか？

今がまさにそのときです。国際社会は日本という隣人と平和で調和のとれた交流をするため、長い間時間を費やしてきました。まず一番最初に取り組まなくてはならない問題がいくつかあります。それらは、罪を犯し、国を去った犯罪者、無責任な個々人、言語の違いなどですが、これらの問題を解決するのは可能です。すべての人が目指すゴールは同じで、平和と調和が存続した中で生きることです。しかしながら、特定のグループの人々が排除されてしまうと、その存続は難しいでしょう。今、日本は“内部”と“外部”文化から、“国際的”文化に変わる時でしょう。

私は結婚して、現在幼い息子がいます。私の妻は日本人であり、私はアメリカ人です。そして、私達の息子は両方の血を引いています。私自身は、本当の意味で日本社会の“内部”に入ることを認められていないかもしれませんが、私の願いは、将来、私の息子が彼が親から受け継いだものを否定される心配する必要がなくなればということです。息子は半分アメリカ人ですが、彼の半分は日本人でもあります。その事実により、私の息子が、他人に彼の受け継いだものを否定されて欲しくはありません。

WORKS CITED

"Racism surfaces over bid by foreigner to buy land, settle"

Asahi Shinbun (English) www.asahi.com/english 29 Jun, 2007
<http://www.asahi.com/english/Herald-asahi/TKY200706290148.html>

"HOKKAIDO: Meat Hope boss to declare bankruptcy"

Asahi Shinbun (English) www.asahi.com/english 12 July, 2007
<http://www.asahi.com/english/Herald-asahi/TKY200707120120.html>

"Groups try to level playing field by limiting foreign players"

Asahi Shinbun (English) www.asahi.com/english 29 Jun, 2007
<http://www.asahi.com/english/Herald-asahi/TKY200706290152.html>

"AROUND JAPAN/IWATA, Shizuoka Prefecture: Neighborhood a blueprint to harmony with foreign residents"

Asahi Shinbun (English) www.asahi.com/english 26 Jun, 2007
<http://www.asahi.com/english/Herald-asahi/TKY200706260072.html>

"NAGOYA: Helping newcomers adjust to life here"

Asahi Shinbun (English) www.asahi.com/english 10 Apr, 2007
<http://www.asahi.com/english/Herald-asahi/TKY200704100060.html>

Jordan. "Brazilian man flees hit and run for fear of discrimination"

Japan Know <http://japanknow.com> 25 Jan, 2007
<http://japanknow.com/brazilian-man-flees-hit-and-run-for-fear-of-discrimination/>

チームワークの心

劉 譔



「日本はどんな国ですか？」突然こんなふうに聞かれたら、あなたはどうか答えますか？日本に来る前の私なら迷わずこう答えたでしょう。―「日本は我が国中国と一衣帯水の国でありながら、科学技術が発達している国です。」その理由は恐らくとてもシンプルです。中学生の頃から私の家のテレビやオーディオなどの電気製品は全部ソニー製で、生活の中には科学技術の発展した日本があったからです。日本の技術に夢中になった私はいつか日本に旅行してみたいと思うようになりました。やがてその夢は日本への留学という形に変わっていきました。私の父は日中貿易の仕事をしているため息子の私を日本に留学させてもよいという考えがありました。そしてついに日本の土を踏むことになりました。高校の歴史の授業で日本は明治維新以降、教育に力を入れており、教育が発達していると習っていたので、安心して日本に渡りました。

日本語学校に入り一年間の日本語教育が始まりました。日本語学校では珍しく中国人留学生は私一人なので来日当初は友達も少なく毎日勉強以外の時間はほとんどテレビを見て時間をつぶしました。日本語を習うのは日本に来てからでしたが、三ヶ月も経つと日本語がだんだん分かってきて、見る番組もグルメ番組からお笑い番組やニュース番組に切り替えました。「エンタの神様」や「ダウンタウンDX」は毎週必見の番組となって、そうこうするうちに標準語だけでなく関西弁も徐々に分かってきました。この時「日本はどんな国ですか？」と聞かれたら、私はテレビ番組がおもしろい国ですと答えたかもしれません。

さて、いつものようにニュースを見てみると、ある時期から「ゆとりきょういく」という言葉をよく耳にするようになりました。聞いたことのない言葉で意味がよく分かりません。百科事典や新聞で調べると、ゆとり教育とは学習者が知識の詰め込みによる焦燥感を感じないよう、自身の多様な能力を伸張させることを目指す教育理念のことでした。一見理想的な考えですが、現時点では色々な問題が出ているようです。中

国でも似たようなことが起きていたので私は大変興味を覚えました。中国では、私が高校受験の直前に教育制度が変わり、試験問題がかなり簡単になり、その後の高校教育も易しくなり、厳しいはずの高校生活も予想外に楽な思いをしました。しかし大学受験のレベルは教育制度と違って以前と変わりませんでした。試験があまりにも難しくて私がいた受験会場では泣き出した学生も多数いました。私たちは知らず知らずの内に教育革新の犠牲者となりました。私が日本の教育制度に関心を持ちもっと知りたいと思うのはこの自らの経験のせいです。それから毎日ニュースを見て、ゆとり教育が学力低下につながり社会問題になっていることを知りました。

とはいうものの、やはり私の心の中の日本は環境が美しく、明るく輝く先端技術の国でした。しかし、私の心を大きく震わせたニュースがあります。

「小学生がいじめられて自殺しました。」

このニュースを聞いた途端、日本のイメージにひびが入りました。今まで私が憧れてきた日本の教育、アジアで一番進んでいる国と言われる日本の教育は一体何ですか？裏切られたような気持ち、騙されたような感覚、このまま日本に留学していて良いのかという疑問が一気にあふれてきて、冷静に考えることさえ出来ませんでした。日本に来る前や来たばかりの頃の、日本への迷いのない信頼の気持ちがなくなって、残っていたのはただの消沈だけでした。この時「日本はどんな国ですか？」と聞かれたら、よくわからなくなりましたと答えたと思います。

それから毎日テレビニュースには必ずいじめ問題の話題が出てきて、一般人から国会議員まで討論に参加し、色々な意見が出てきました。ここまで討論が拡大してきたので私もいじめの原因を考えてみました。報道によると、いじめる子供は色々な事でストレスをためて最後爆発するみたいに他の子供をいじめる、それによってストレスを解消しようします。そして自分がいじめられないようにいじめる子供に協力する子

供も多数いるとのこと。これは皆の目的を果たすためのよい連携ではなく、悪質な連携です。私にとってこれはまさかのチームワークでした。なぜいじめを止める人がいなくて、逆に手伝う人がいるのでしょうか。私の中学校や高校では、もしいじめが起こったら必ず止める人が出てきます。そして皆もその人を手伝っていじめを止めさせます。ただ格好付けるためにいじめを止めさせるのではなく、正義のためと言っても過言ではないと思います。たとえかっこつけるために止めたとしても悪くないでしょう。

日本の治安はかなり良いのですが、なぜ正義を持っている子供が出てこないのでしょうか。正義感を持っている子供も必ずいると思いますが、行動に出ない理由は恐らく現代の日本社会に原因があったと思います。「正義は必ず勝つなんてアニメの世界にしか存在しない」と言う言葉が私の日本人の友達の口から出ました。彼はまだ高校生です。なぜそんな早く正義を見捨てたのでしょうか。確かに正義は必ず勝つとは限りませんが、皆が正義を信じてはじめて正義は勝つようになります。信じようとしらない人々の周りに正義は存在しません。今は平和の時代、皆は平和な生活を送っています。この平和を保つために正義は必要です。日本には「武士道」という言葉があります。私の大好きな映画「ラストサムライ」にかつて英雄となったネイサン・オールグレン大尉（トム・クルーズ演じる）は勝元（渡辺謙演じる）に武士道精神を教えられ、金銭や地位などを捨て本当の正義を命がけで守ろうとしました。映画に出ている天皇が言った様に今の日本は「武士道」がどんどん忘れられています。もし武士道の気持ちがあったらいじめがなくなるのではないのでしょうか。

いじめ問題でもう一点私が驚いたのは、この問題がマスコミの報道だけでなく党首討論の内容にもなっていたことです。後でいじめられた子どもが次々に遺書を文部科学大臣にあてて書いて送ったことを知りました。国民全員が関心を示していたのはそのせいでしょう。ただ、このニュースに限らず日本ではマスコミが毎日報道するので同じニュースに関心を示す人が多いと思います。一方中国ではマスコミが他の新しいニュースに切り替えて報道する場合が多いので関心を持ち続ける人がどんどん少なくなります。党首討論みたいに国会で話すのも考えられないのです。しかし日本では大勢の人が関心を持ち、政府もさらに特別な対策を立てて事件の解決やこれからの予防策まで全面的に考

えています。私は自殺のニュースに驚きましたが、もっと驚いたのはこの日本の対策と行動でした。素早く対策し、何も隠さず全面的に報道し、文部科学省や国会まで事態に関心を払うのもまた現実の日本でした。

ニュースを見ているうちに、日本の国民の、この国を一步でも完璧に近づけたい気持ちがよく分かってきました。一度迷ってしまった私でしたが、再び決意を決めました。日本は今まで思っていたほど完璧な国ではありません。しかし、私はまだ日本のことが良く分かっていません。中国では昔から「目で見たものは確実だが、耳で聞いたものは当てにならない（百聞は一見に如かず）」という諺があります。私は日本に来て「本当の日本」を見はじめていたのです。それなら本当の日本をもっと見てみたいと思ったのです。

こうして一年後、本当の日本をこの目で確かめたい、この体で感じたいという新しい気持ちとともに科学技術への憧れから、日本の大学の工学部に入学しました。大学は山梨大学という、建物からも巨大な富士山の姿を眺めることができる大学です。ここは都会ではないため物価は比較的安く、静かな町です。地元の人々は自然を楽しみながら平凡な生活をおくっています。変わらず教育に強い興味をもっている私は相変わらず毎日テレビを見ていました。日本の教育を受けながら世間の評論を聞くと、だんだん日本の教育が分かってきた気がします。「大学でもゆとり教育の影響で学問が簡単になっているなあ」と最初に思いましたが、ある事件から私の考えは変わりました。

大学三年前期のガイダンスでもらった成績通知書に私の単位はクラス一で成績もほぼ優でした。自分の努力よりはっきり感じたのは中国の基礎教育の威力でした。大学に入り微分積分など基礎知識をほぼ完璧に習ってきた私にとって日本の大学の基礎知識は楽でした。しかも、中国で受験戦争をくり抜けてきた私はテストについても既に試験のプロフェッショナルのようになっていたと言っても過言ではありません。もしかすると中国で勉強したほうが良さそうだと思います。はじめた頃、三年生の必修の実験が始まりました。今まで通りに気楽に出来ると思いましたが、予想外に大変でした。周りの人がどんどん出来ていて、私だけ出来ないケースが良くあり、内心焦っていました。私は自分がこんなに出来ないとは思っていませんでした。最初は恥ずかしくて何とか自力で解決しようと思いましたが、どうしても時間がかかってしまうのです。ある日、私

の実験はいつものようにあまり進んでおらず焦っていた時、クラスの友達が助けようかと声をかけてきました。「僕は自分でやっても出来る」と思ったのですが、わざわざ来てくれたので、友達の助けに乗ってみました。すると、奇跡のように短時間で実験が終わりました。それは全く予想外でした。友達は実験の進行の中で私はかなり自信を持っている部分に疑問を持ち、進め方について一緒にチェックしてくれました。すると私の間違いが見つかったのです。「この実験の目的はもちろん今まで勉強してきた知識をもっと高めるためであるが最も大切なのは君らのチームワークを作るためであった」。先生の一言に驚きました。私は実験の目的も知らずに今まで何を勉強してきたのでしょうか？夢の中の私はこの先生の一言で目覚めました。このとき私が出会ったのは「チームワーク」でした。ずっと時間を掛けて一人で頑張ってきた私はチームワークをはじめて体験しました。気分は最高でした。友達と一緒に実験すると、自分が気づかない部分に相手が気づいてくれてミスが減ります。一緒に勉強すると、相手をチェックし自分もチェックされて共に効率的に進めることができます。そして最も重要なのはお互いの友情もこの共同作業の間で深まっていてさらに仲良くなれることです。それ以来実験や勉強などは他の学生との共同作業が多くなってきて効率がどんどん上がり勉強も進み、親友も出来て一石三鳥の成果を得ました。

私が今まで考えてきたのはすべて、ただどうやって問題を解くかということでした。そして他人の助けを求めずにただただ自力でやろうとする寂しい考えでした。中国でもチームワークという言葉を知ったことがあります。勉強に使おうとは思いませんでした。そして何より先生たちも教えようとしませんでした。個人の能力を強調し、何でも個人で解決するべきだということが私の中国で受けた教育でした。ですから今まで一人で頑張ってきて、一生懸命自分の存在を証明したくて他人より何倍も多く努力しましたが、最も重要なことが分からないまま挫折しました。目覚めた私は日本の教育と中国の教育の決定的な違いを見つけました。それは人を学者として育てるだけでなく一人前の人間として育てることでした。中国で習った学問はすべて受験のためでした。もちろん将来仕事をする時に役に立ちますが、肝心な人間関係について何も教わりませんでした。それでは社会に出たらどうやって生きていくのかも分からないまま社会人になってし

まうのではないのでしょうか。一方日本では学問を徹底的にたたき込むことはしませんが、学生間の絆やチームワークに力を入れて、将来立派な社会人を育てようとしています。確かにいじめ問題みたいに悪いチームワークも若干存在しますが、教育上教えられてきたのも社会で強調されてきたのもいいチームワークです。

教育は矛盾です。今あちこちで日本の若者の学力低下が問題視されています。学力低下は一見非常に危険な事態ですが、その裏に人と人の触れ合いや社会的ルールを強調し、人の学力ではなくチームワークを高めようとしているといえるのではないのでしょうか。どうやってこの両刃の剣をうまく操るのが世界的な大問題となっています。中国は学問を選びましたが、日本はチームワークを選びました。学問を選んだ中国では今まで育って来た学者が大勢います。しかしノーベル賞を取った正真正銘の中国人は一人もいません。原因は恐らくチームワークにあります。一人の力は有限ですが、皆の力を合わせれば無限になります。チームワークを知らない学者はいくら賢くても限度があります。チームワークで力を合わせればさらに素晴らしい発想や発見が得られるでしょう。日本には半導体におけるトンネル効果の発見をした江崎玲於奈やニュートリノの検出に対してパイオニア的貢献をした小柴昌俊などのノーベル受賞者がいました。そこには個人の高い能力が勿論あったのですが、最も重要なのはチームワークでした。一方ただチームワークを強調し、個人の能力を失ったらいくら皆で考えても結局難問を突破できず進歩がありません。チームワークとは個人の力を合わせることで、個人の力を無くしたチームワークは、人が無駄に多くて、秩序がない渋谷駅前のスクランブル交差点と変わりません。

日本に来る前の私がイメージした日本は理想郷でした。来日後いじめ問題にショックを受けた私にとって日本はぼんやりとはっきり見えない混沌の国になりました。それは全く蜃気楼を見ている感じでした。しかしじっと見つめていたらその蜃気楼の中から日本のありのままの姿が部分的に見えてきました。これから日本で大学生活を続ける中でもっとたくさんの日本の本当の姿を見つけて行きたいのです。あなたには日本がどう見えますか？私の見た日本はいろいろな問題を抱えながらもチームワークを大切にする新しいサムライでした。

日本の食文化



朴 恵蘭

日本にはじめて来たときに、友人が連れて行ってくれたところが、カレーうどん屋であった。どちらかというと、麺類が好きでない私は、あまり乗り気でもなかったが、母国韓国にはない食べ物なので、仕方なく付いていった。ともかくも、食べ物だからと思って我慢をしても食べようと思って、一口口にした。美味しかったのである。カレーうどんを始めとして、後日、ヤキソバも美味しいかもしれないと思って、ヤキソバも食べて見た。

韓国では、全く味わったことのない味が、身近に存在しているし、何よりも美味しかった。そのことが、調理の学習研究を進めて行きたいと思う、大きな一歩になった。

もっとも失敗があった。カレーうどんは、すぐに作れないまでも、ヤキソバならば、家庭で作れると思って、ある日ヤキソバを作って見た。私の家族は、もちろん韓国人だが、あまり、美味しいとは言ってくれず、むしろ評判が悪かったために、がっかりした。いろいろ反省して見ると、どうも原因はソースにあったようである。評判の悪さが、研究心を駆り立ててくれた。調理の研究ができる大学の受験を目指して、日本語学校に通っていたときのことであった。

韓国と日本とは、近くて遠い国と言われるように、地理的には緯度も経度も近いけれども、お互いが似ていることもあって、意識的には、極めて競合しやすい民族同士であるように思う。それだけに、お互いにわかっているつもりで、わかっていないことが多々ある。その具体的な例が食文化であろう。お箸を使うし、お雑煮はあるし、巻きずしもうどんもあるしということが、共通性の大きな原因であろう。しかし、立ち入って一つ一つの事象を見てゆくと、両国の食文化の差には、食哲学とも呼んでよいような、奥深い食文化に対する考え方の差があると思う。

第一に、食卓に載る「お箸」と「お匙」の問題がある。細かいことは抜きにしても、韓国では、食卓にお箸とお匙とは欠かせない。今でこそ、お箸で御飯を食べたからといって、親から注意されるようなことはな

いとしても、元来御飯はお匙で食べるものと決まっていた。お箸で食べるのは無作法として叱られたものである。ましてや、御飯のお茶碗を持って食べるなどということは、お箸で御飯を食べる以上に無作法なことであった。韓国で、お茶碗を持って食べる食事作法が嫌われたのは、貧しい乞食の貰い歩きに原因があるかもしれないし、日本でお茶碗を持って食べなければ、前かがみになってしまって、まるで犬が物を食べるような食べ方として嫌われたことも、後に知ったことであった。和食で、お匙が使われなかったのは、歴史的なことも関係あったかもしれないが、我が国韓国では、歴史的な遺品にも、お匙が残っており、その歴史が古いことが理解できる。

第二に、食生活における、礼節の問題がある。先に述べた事柄も、礼節と関係が深いと思う。韓国では、とりわけ礼節の基本が食文化にある。現在は、貴族階級であった両班（ヤンバン）の文化そのものを継承することはない。しかし、両班が築いてきた礼節の考え方は、儒教文化としても、深く国民に浸透している。家父長制度が徹底していた時代には、家族全員が揃って食事することがなかったのだが、近代化が進み、家族関係に民主的な人間関係が確立されてきた。今日では、古い時代の美徳が美徳でなくなってきたのである。しかしながら、韓国では食事の時に、家父長である人が手を付け始めなければ、絶対に食事を始めてはならない鉄則が、はっきり守られている。会食などのときでも同様に、教養の度合いが食事作法に現れるほどに、食事の礼節については、厳しい習慣を守っている。

一方、日本での礼儀作法では、「いただきます」「ごちそうさまでした」という、食前食後の挨拶が、本当に綺麗にされている。大学の食堂でも、時に、学生が食膳に向かって合掌してから食事を始める姿を見かけることがある。たしかに美しい。西洋人も、食前に「主の祈り」をする光景を目撃するが、西洋の習慣として、食後に感謝の気持ちを籠めた礼節の表現があるのかどうかを知らない。韓国にも、「おかずが少なくて失

礼だが」と言った挨拶に対して「戴きます」とか、「本当に美味しく戴きました」という表現は、日常的に使用しているが、日本人ほど徹底した挨拶には、なっていない。食事に対する感謝の念の教育が深く浸透しているためであろう。

私は、前にも述べたように、料理を勉強している一人の学生である。それだけに食生活に対する思いは、他の留学生よりも敏感かも知れない。私が母国を離れるときに、それなりに料理にも自信を持っていたし、技術的にも一般の水準よりも高いレベルにあったと思っている。しかしながら、微妙な味付けの問題については、本当に苦しい思いを持ち続けている。日本の料理の特性は、韓国との視点と違って、間違いなく季節感を重視している。母国韓国よりも、日本は春秋が少しずつ長い。日本は、穏やかな気候の期間がとても快適である。そのせいか、春秋の期間の旬の食材には、素晴らしいものが多い。例えば、春のタケノコ、鯛、秋のキノコ、サンマには、その料理法の多彩さと共に、驚異的なほどの豊かさがある。また、盛り付けにおける、中間的な色彩感、盛り付けに調和する、見事な器ものの贅沢さは、まるで美しい映画の一コマを見る思いである。それが、普通の家庭料理の中にまで、持ち込まれているのが素晴らしい。母国韓国の宮廷料理においても、季節感が尊ばれ、器ものに工夫が凝らされ、色彩は、赤、青、黄、黒、白の五色を基本とする、色彩美が強調される。また、味付けでも、甘さ、塩辛さ、辛さ、苦さ、すっぱさが基本であるが、最近では、大切な味として「旨み」が強調されている。日本との視点の差は存在するが、独自の伝統的な料理の世界がある。しかし、最初に触れたように、季節感だけは、日本独自の発達をしてきた世界であるようだ。

日本では、韓流ブームが続いている。我が国では日本文化の開放が続いている。重苦しい歴史問題を持つ両国にとっては嬉しいことである。「チャングムの誓い」(原題「大長今」)は、母国でも好評であったが、日本でも評判がよいことを知ってとても嬉しい。とりわけ、料理に関する映像や、宮廷の調理法や、数々の料理の知識は、専門の立場にある人からも大変参考になったということを聞くことが多い。たとえば、黄砂の話である。宮廷での料理が腐りやすい中で、主人公である幼いチャングムの厨房だけは食べ物腐らない。不思議に思った女官(尚宮)たちが、原因を調べて見ると、チャングムだけが水を煮沸して使っているという。聴けば、かつて宮廷で料理人であった母親から水で煮沸

することを教わったという。幼い子供のときのチャングムに伝えられていた母親の知恵の深さと、ドラマであるとはいえ、科学的でなかった昔、健康や安全に気をつけていた、伝統的な母親の知識を見ることが出来て、深く感動した。

「チャングムの誓い」を通じて、料理は心であると教えられている。また真心がなければうわべだけの小手先の料理では本当の味は出ないと、何度も痛感した。時間をかけた「陰干し」が大切であるとか、三十種類以上の医薬水と呼ばれる水の微妙な味とか、次第に知識を得てきた。また、全ての料理の基本である水については、韓国では大変大切にしている。極端に言えば、水の種類だけでなく、水の飲み方にまで注意を払うのである。例えば、のどが渇いている人に水を差し上げるときに、器の中に柳の葉などを、目立つように入れて、水を飲む人が慌てて水を飲まないような心配りを欠かしてはならないといったことを、子供のときから母親や昔話を通じて学んでゆくのである。自信をつけてきた私は、再びヤキソバを家族に作って見ることにした。時間をかけて、とりわけソースに工夫を加えて、自分では満足したつもりで、試食をもらうと、たしかに前より美味しくなった。しかし、どうも味がもう一つだという。私は悩んでしまった。問題はソースだ、ソースを工夫することが大変なのだと自覚してきたのである。

そんなときに、バイオリン製作者として世界的に有名な陳昌鉉先生のお話を知る機会があった。先生は『海峡を渡るバイオリン』の著者としても良く知られた韓国の方である。先生は、人間の耳は20Hzから30kHzまでしか聞こえないものである。しかし、自然の美しい音は、その音域を越えて超低音、超高音となる超音波を感じるはずだ。また、440Hzのラの音の、倍音880Hz、その上の1200Hz、さらに5倍、10倍、100倍、1万倍の振動が存在する。その無限の振動が名器のバイオリンにあると述べられて、「音というのは料理みたいに隠し味がある」と述べられていた。人の心には、確かに描ききれない広がりがある。チャングムの場合も、味覚を失っていたとき、「味を描きなさい」という指導を受けているのを知って、料理の道は、深いものだと思ったけれども、陳昌鉉先生の一言は、私に大きな衝撃を与えた。音楽の世界から教えてもらった「隠し味」である。

隠し味については、チャングムでも出てくるし、私自身も、日本語の隠し味の表現は知らなかったが、た

しかに隠し味が必要なことをよく理解していたつもりであった。チャングムでは、牛肉の味を引き立てるために牛乳を使うとか、それとわからずに味付けするときに香料を使うのである。しかし、大学の先生から和食を教えていただいたときに、隠し味が必要であることを、本当に何度も何度も教わって、自分でそれなりに分っていたつもりであった。でも違う。陳昌鉉先生のお言葉で、本当に見えないはずのもの、聞こえないはずの音、味わえないはずの味覚に到達してゆくことが、本当の隠し味であるということを教えていただいたのである。味がよくなるだけではない。食材を引き立てるだけではない。真心を籠めて料理を作るだけで

はない。それ以上に深い、食べていただく方の心に響く音を伝えられるような料理人としての自覚を持って一日一日を努力してゆきたいと思う。

もし、私が料理人として大成することがあったしたら、何よりも陳昌鉉先生のお言葉が私を勇気付け、私を導いてくださったということを、心を込めて御礼を申し上げるつもりである。そして、自分の道を切り開こうとして悩んでいた私には、今新しい出発ができる自分を発見できた気がしてとても嬉しい気分である。「私が見た日本」の表題で応募する機会がなければ、新しい日本も私も発見できなかったかもしれない。心から感謝したい。

The “kaomoji” and the human communication



Alberto Hikaru Shintani

1. Introduction

Studying abroad gives you a great opportunity to think not only about that new country you are living in, but also about your own homeland and even about other countries too. To be in contact with different cultures and see their way of living, habits, backgrounds and characters is a unique opportunity for a young student, like all of us, still in the beginning of our lives, to learn things that otherwise we probably could not learn: to see in the similarities and differences between different countries the same human beings we all are, and so learn about ourselves too. But in my opinion, the most important things we learn in these occasions as foreign students are those we deal with in our daily lives. With this essay, I would like to explain one of these things I have realized, a very common habit that young people have in Japan and use it as a representative symbol to discuss about a more serious topic, about the social situation related to it.

One of the most impressive things I saw during my

first year in Japan was the very popular use of the so-called “kaomoji” (顔文字, literally “kao” means “face” and “moji”, “letter”) in the text messages I received. Not that in my country we do not use this kind of symbols, but the frequency I see them here is quite different from that I was used to. I confess that sometimes I still have to think for some seconds to guess the meaning of some of those I am not used to or even to write them myself. Anyway, the aim of this essay is to discuss the “kaomoji” usage in Japan and the “kaomoji” as an indicator of a quite serious social problem. I am not an expert in the matter, but I think no experience other than sending-and-receiving e-mails and talking to your friends is needed to think about it either.

Maybe a good beginning for this short essay would be the definition for the “kaomoji”. Of course that a definition for something so dynamic and easily changeable as this topic may not be an easy task, but I would describe the “kaomoji” as: *“a graphic symbol used in informal texts messages to transmit emotions, feelings or*

attitudes using letters, ideograms or other simple symbols, mainly through electronic gadgets (like a computer or a cell phone). Unlike the horizontally oriented western-style symbols, the 'kaomoji' are usually vertically oriented". The word usually accepted as the English translation for "kaomoji" is "emoticon" (or sometimes "smiley"), but they will not be used in this work because the nuance in each of these two English words and even the structure of the western symbols themselves differ from those Japanese ones, so from now on only the word "kaomoji" will be used. Another difference between them is the fact that the Japanese "kaomoji" are more numerous in shape, number and meaning than the occidental "emoticons", maybe because the alphabet letters are 1 byte each, while the Japanese symbols are said to be 2 bytes, which would permit symbols that do not exist in Occident.

Just to give a few examples of the Japanese "kaomoji":

(^ ∇ ^) (˘('·w·`) (T_T) (。 · _ · 。) ∪ (~ ~ ~ ;)
(· _ · ?) (☺ ^ w ^ ☺) (^ ▼ ≤ ˘) f ^ _ ^ (* · _ ·) ∪ ~ * (; r ')

Note: the Japanese word "kaomoji" will be used here both to indicate the singular and the plural form, without adding an "s" at the end to make the expected plural form.

2. The advent of the "kaomoji"

The reason for the popularity of the "kaomoji" can be easily guessed without a deep study: to transmit informations that simple alphabet letters or even Japanese ideograms cannot transmit, because of the natural limitation of the written texts. In other words, in a face-to-face conversation, one can use body language, smiles or any other facial expressions that help to complement those spoken informations. But with the development of the Internet and gadgets related to it, the online chat became almost as fast as the traditional face-to-face chat could be and little by little the virtual communication gained popularity to the detriment of the traditional communication. Several on-line chat-rooms and Internet forums are the proof that the electronic communication has achieved this point.

However, the weak point of this kind of communication is the impossibility to apply emphasis to

some words or expressions using the sound (like a different intonation, voice, volume or pause), the own face (like a smile, an eye blink or an eye movement) or the whole body in general (like the hands or the shoulders). Therefore, the advent of strategies that could, in certain sense, cover these failures is quite expectable and even necessary.

If we think about our usual written texts, there is also a very similar but quite old technique: the punctuation marks used in the occidental languages and even in some oriental languages too. They also have absolutely the same usage: to apply in a graphic symbol emotions the author felt while writing that text and transmit the written contents to others (even to the posterity) in the most precisely way as possible. But is necessary to say that these now necessary items of written language, known as punctuation marks, were widely incorporated only a few centuries ago. For example, the exclamation mark (!) is believed to come from the Latin word "io", an expression of joy. The letter "i" was written above the letter "o", making a kind of abbreviation, and later originated the exclamation mark as it is now. In the same way, the question mark (?) is said to come from the Latin word "questio" (meaning "question") that was abbreviated by its first "q" written above its last letter "o", a corruption that evolved to the present question mark. All this happened probably in the end of the Middle Ages or a bit later.

In a similar way, as the punctuation marks, we can say that the "kaomoji" (and all the other similar symbols) were created as a consequence of the development of the modern communication. *Mutatis mutandis*, the "kaomoji" is a modern update of the written language, as the punctuation marks were some centuries ago. Nevertheless, it is important to say that in this comparison the only factor used to compare them was the necessity to improve the precision in the communication and it is not the aim of this work to discuss the impact of this kind of symbols in the orthography or even in the grammar orthodoxy.

3. The modern communication

It is of common knowledge that in recent years the

Internet and other technologies have facilitated the communication to the extreme that the face-to-face meeting is not anymore a condition to information exchanges. (The expression “information exchange” was used here because this kind of virtual communication cannot be called “social relation”, in the traditional meaning of it). And as we have seen, the “kaomoji” has been probably developed through the recent years to facilitate and even to simplify this same written communication. However it may also be a good indicator of a well-known social problem: the problem in the human communication itself. It may sound a strange contradiction the fact that a development in the communication is actually a consequence of a problem in this very communication. But to explain it in other words, with the development of the “virtual communication”, the real “human communication” became more and more rare, reduced to a mere unfriendly and cold “information exchange” through virtual ways, that could barely satisfy the natural tendency of human beings to the socialization. Therefore, this “dehumanization” of the modern communication probably provoked the necessity of “rehumanize” it in some way. Instruments like the “kaomoji” may have been used to make the “virtual communications” as “human” as the face-to-face one, to make it as “real” as the real one. That is the reason why the “kaomoji” was used here as a representative symbol of the admirable tentative –maybe unconscious one– to resuscitate the genuine human communication.

4. Communication: the Japanese case

In my first year of student life here in Japan, I was quite amazed by the quantity of students using cell phones. At least in my country –and I am sure that there are many others too– the “cell phone culture” has not yet achieved the point Japan is passing by now, a situation where even young children have their own phone or where friends exchange e-mails using their cell phones during the class, even being in the same classroom or in the next desk.

This kind of behavior can have a lot of serious social

impacts. For example, in my personal opinion, this lack of “real communication” is one of the causes of the high frequency of the so-called “hikikomori” (引きこもり) or even the “suicide” (自殺) cases in Japan. It is not strange or rare the fact that people have problems in their own professional, familiar or social lives, but the strange and even rare is that these people do not have anyone to help them to solve these problems. Without anyone (even their own family) to help them, these people decide to withdraw from any kind of social encounter, by staying locked in their own room (“hikikomori”), and just fleeing from their problems, instead of facing them as would be expectable. Maybe these people never had the opportunity to have a “real communication”, a “human communication” to show them how precious it is. Maybe all their lives were full of “virtual communication”, but lacked the “human communication”. Otherwise, asking for advice and help would be a more common attitude in response to their problems.

5. Conclusion

As the socialization is a natural characteristic of all the human beings, all the movements that go against it are surely origins of other social problems. And the problem of human communication is obviously included here.

The “kaomoji” example was explained here only as an example of the tentative –maybe unconsciously, but also genuine– of young people to “humanize” their communication, that recently have been less and less warm and “human”. Although the problem of lack of communication can be surely considered one of the biggest social problems of the modernity, it is also good to see how people react –maybe unconsciously again– to reject the bad effects of their epoch, maybe without knowing the best solution or even the causes of the problem. It is discussable whether simple solutions as “kaomoji” are really solutions to the problem, but the simple search for a solution is, in some way, part of the solution.

We, the young people, are said to be the hope and future of the society. I hope that we are guiding it to the right direction! (*・_・)ウーン・・・

Japan..The wisdom of silence



Sherin Elsayed Mahmoud Shaaban

A geisha, a painting of cranes stretching their wings over an old Japanese garden, a samurai, a unique bouquet of Japanese flowers or what was known to me later as “kado” or “ikebana”, little girls with silky black hair or thousands of men dressed in dark suits wandering the busy streets of Tokyo. That was the very classic image I had for so long about Japan.

This image could have persisted even after coming to Japan, since this mixture of the modern and the past is not very difficult to find until now in many places where scenting the smell of the past is very much possible even in the most modernized districts of Japan.

But that was not –and still is not- what I was looking for. I am not sure if this happens to all foreigners coming to Japan from developing countries like mine, or if I am a special case. I came to Japan burdened with my country’s economical, political and -very naturally in consequence- cultural problems. I came with my eyes wide open hoping to find among the Japanese an answer to the turmoil roaring in my mind: “What is the way out of the troubles my country and my people are suffering from?”. Maybe Japan seemed to be so encouraging to learn the lesson for reasons that seemed very interesting to me. The first was that ironically Japan started its modernization during the Meiji era, at nearly the same time when a serious modernization attempt was being tried in my country Egypt by Mohammad Ali in the 1800s. Yet Japan’s experience was meant to survive while ours was sadly aborted. The other reason why Japan was encouraging is the fact that the Japanese managed to build their glory while they are “yellow”. As much as I hate such racial or color stratification of people, yet we can not deny that the western and the American media machines so often managed to confuse us, and make us wonder if actually being developed is a synonymous to

being “white”!

Sometimes people choose their destiny, and sometimes it is imposed upon them. Which case is Japan? To me it seems both cases are as much as true. Japan with its geographical location- a group of islands at the very far edge of the world-, a beautiful though very hard nature of mountainous lands with very narrow valleys, a land with nearly no resources. This nature with no doubt had imposed hardship on the people, and seemingly offered the Japanese one of 2 choices, to struggle to survive, or to be weak and be forgotten. So somehow this hard nature helped sculpt the Japanese personality. This is why “rice cultivation” seems the corner stone into understanding the Japanese; it seems the start and end point whenever you try to go deep into the Japanese soul. Even in the modern Japanese mind, the word “rice” simply means survival. So it was not strange when a friend of mine was telling me how her father used to scare her in order to study hard to become a doctor, manipulating her subconscious by telling her that becoming a doctor simply means to be able to have “rice” for dinner! In a land with such a hard nature, and of such minimal resources, it was very natural for people to know that they can not afford the luxury of being lax about “food”, about “rice”. Because very simply being lax means to jeopardize the lives of all, a price much more expensive than anyone can afford to pay. This might be where the team soul the Japanese are very famous for started. And until now, though the Japanese are very much wealthier than when rice was everything, yet that sculpted personality seems to have become a genetic mutation that persisted through generations up till now. This was very obvious to me as a foreigner when the Japanese people introduce themselves on first meetings or when talking on the phone; their names are

mentioned only after mentioning the name of the group to which they belong. Like saying: “Tokyo daigaku no Suzuki des” which literally means I am Suzuki of Tokyo university. Rather more interestingly there is no mention of what this “Suzuki san” might be doing at this group. Is he on the top of the hierarchy or a simple worker he is? Simply because the value of Suzuki san is not how big or small his role is in his group, but rather his value is the value of his group as a whole. Such a belief must have been the reason how work to the Japanese became a synonymous to honor. When you get to know the Japanese you feel they were created to “work”. Work in Japan is a virtue, an honor in itself, not just a means to earn money or improve one’s quality of life. Again this explains how a Japanese person might choose to end his life if he thought that by his actions he might have disgraced his group or company. An act that still dazzles people from all over the world until now, yet maybe to the Japanese mind it is very well understood and justified. This is also why I find it amazing that dedication and sincerity the old man who waves his flag at construction sites shows to warn bicycle riders or people walking across those seemingly dangerous sites. A very simple job, yet with his dedication it transforms into an outstanding example on how things get their value from how we see them.

One other amazing aspect of the Japanese mentality is the absence of “difference” as a value or a goal, unlike western cultures where being unique is a goal. The Japanese mind on the opposite side rejects such an attitude, and on the contrary the more similar you are to your colleagues or peers, the more accepted you become into your group. And naturally this is why Japan is still one of the very few countries where school and company costumes are still very popular. Walking in the streets of a small or large city, it would be very difficult to tell how rich or poor a person is from his looks or what he wears. It was really astonishing to me, I remember it was my first “hanabi” in Japan, and there were thousands in homogenous crowds. The thought that struck my mind at that moment was: “This is socialism in an undoubtedly capitalist country”!

One can not be talking about Japan or the Japanese

and help not revive the memories of the Second World War. What consequences did this war have on the Japanese soul and mind? And how did they manage their defeat and up rise again among nations as a strong, rich and highly productive society? To me it is all again about the strength of the Japanese personality that was created over the years. This is why I really doubt the idea that Japan’s post war fate was dictated by the USA. Nations’ fates can never be created by decisions, and success can not be dictated. Changes only happen when the nations have the will for change. And I assume the Japanese had the will for change at that time. It is not about political or historical facts. It is about how the Japanese faced their fate courageously, how they defeated their defeat, and how they converted their failure into ultimate success. The time of that war could be the saddest memory in the history of modern Japan, but at the same time and ironically it is by no doubt one of the turning bright moments when the Japanese renewed their oath of an ever lasting struggle against conquer neither by nature nor by history. There is a photo in the peace memorial museum in Hiroshima, where a flower grows among the ashes and the massive devastation. That photo never fades in my mind. As if that was the Japanese message to themselves and to the others at that time, a message saying: “we are here to stay”!

Yet, to me the question remained. What is the cultural or moral base behind all this? It is inapplicable to apply the pattern of what happened in Europe -with the industrial revolution and the era of enlightenment- to Japan. It simply does not work. Again, Japan stands there, unique in its geography as much as it is unique in its history and evolution. It is true that Buddhism and Confucianism with no doubt had influenced the Japanese mind. Yet like in my country, where Egypt used to absorb all the cultures or religions that influenced its cultural heritage, and used to mix it and reproduce it to make its special unique culture. I guess this applies very well to the Japanese culture. The Japanese have been affected by such religious or philosophical influences yet in a unique way. The Japanese reproduced their own cultural cocktail, that cocktail that managed to transform morals into a social custom. The Japanese mind seems to

be purely secular. People conform to their “unwritten constitution” of morals maintaining their social solidarity, with no reference to religion or any super-powers. And even if some Japanese perform religious rituals, I can assume that this has no direct influence on the daily attitude of the Japanese, but rather the secular moral system is what has the upper hand in that.

I always believed that to see through a nation you have to see its art and read its literature. And although my experience with the Japanese intellectual production such as novels or movies is to some extent limited - due to my poor Japanese language abilities - ,yet through these few experiences it was not hard to figure a common theme in most of the works I had the chance to read or watch. In most, the author or director tried to be as concise, as sharp, and as deep as one could be. With very few dialogues and a special tendency to symbolism, any idea was expressed. Silence in Japan is the real wisdom. The unspoken is way more important than the outspoken. What you can imply and hence what the other can figure is much more appealing than what can frankly be told. With hardly any words outspoken, the beauty of the tea ceremony for example is the chance it gives one to enjoy the silence, the beauty of the tea room, of the cup or of the calligraphy painting on the wall of the room. Simply it the chance it gives to feel beauty without many words.

A very famous Arabian poet said:

“Our words about love; kill love. Words die when outspoken! “. Did not the Japanese believe the same? Did not they adopt simplicity and silence as their logo? A logo that tells all about the deeply complex nature of the Japanese. The complexity that is very much beautifully not outspoken.

This special nature of the Japanese personality might be very difficult for a foreigner to understand. I remember first coming to Japan, a lot seemed to be so strange to me. Even simple daily practices were hard to adapt to or compromise. The lack of “touch” as a way to express feelings for example, was very confusing to me in the beginning. Coming from a culture where touch is a very important element in human relations, it was a dramatic change when the maximum I would expect would be a head bow and a smile. It was even more difficult to comprehend how even among parents and their children, feelings are not expressed by touch. How then do people transfer their feelings? Does this oppress feelings? Or does it intensify feelings that somehow they are felt by others even without touch or being spoken out? Does this bring us back to the “beauty of the unspoken?” This seems to me one of the hardest things a foreigner might face in Japan. The balance one has to make to be able to approach the Japanese without being so “intruding”, yet be able at the same time to understand and perceive their feelings and gestures not to miss or reject some kind feelings that might be hidden beneath this veil of silence.

Living among the Japanese, I got to learn more and more about them. Yet hand in hand I managed to know more about myself and about my people. Maybe that image of a geisha or of a samurai would remain in my mind after me leaving Japan. But for sure, the impression it will leave behind is by no way similar to what it used to have before I came here. To see through, you have to see from within. Beyond the shown you shall see, beyond the said you shall hear.

Japan: A Place to Call Home

Vishal Varma



Several years ago, as I waited impatiently to clear immigration at Kansai Airport clearly marked for Japanese and foreign residents of Japan, a woman tapped my shoulder. With a sense of trepidation, she told me in English that I was standing in the wrong line and should move immediately to the queue marked “For Foreigners.” I explained that I was a resident of Japan and I was permitted to use this line as well. Our conversation ended abruptly but I was puzzled. The only way the woman knew that I was not Japanese was because I did not look “Japanese”. I proudly call Japan my home and I am pondering whether to become a Japanese citizen, but is Japan ready to include foreign-born immigrants in its society or does xenophobia run so deep that acceptance is impossible?

My love affair with Japan began in the early 1990s. Fresh out of an American college my wanderlust brought me to Japan. What better place than an island nation which provided an ideal location for bi-annual trips to Mainland Asia and beyond, an easy English teaching job coupled with the benefits of the rising yen? When I first came to Japan, I lived in a small city in Mie Prefecture, surrounded by mountains and close to the sea; it gave me a real sense of belonging. I had the luxury of time to meet my neighbors and cultivate friendships with people from Japan and overseas. Even with my nonexistent Japanese at first, I felt people were always willing to help and go out of their way to make me comfortable.

Fifteen years ago, foreigners in the Japanese countryside were few and far between. The ubiquitous greetings of “Hello” or “Gaijin san” by school children and the elderly always made me feel welcomed like a distinguished traveler or guest. As I learned Japanese much to my surprise a simple “*arigato*” brought a

barrage of praises. I studied Japanese history and visited many historical sites. The temples of Kyoto and Nara made me aware that throughout history Japan has not existed in isolation. A lot of its history and culture has been influenced by the rich civilizations of China, Korea and even India. Yet, as Japan on the one hand took its script and religion from overseas, it tried to keep foreigners out. During *sakoku* Japan even forbade people from leaving the country. However, it got information and much needed products like guns through the small Dutch outlet off Nagasaki. Japan, throughout history seemed to have taken what it has needed and kept out anything that could possibly disrupt the social order.

After a three-year sojourn I left this country to pursue a master’s degree in the US but returned back to Japan within seven months. Japan was seductive, charming and I could not stay apart. I went back to teaching at the same school, later got a master’s degree in Japan and returned to teaching in a junior high school.

In total I have lived in Japan for over 15 years and I speak Japanese well. Most of those years were spent in Mie, except for two years in Niigata for graduate school. Last year I moved to Hiroshima to teach at a private junior high school. My duties require me to attend teachers’ meetings, take students on trips and teach English by myself not as an assistant language teacher. At school I am just a teacher and I get the same benefit and respect that other Japanese teachers receive. But outside the school is a different story. Hiroshima is a big city compared to the village I lived in Mie. There are many foreign residents and hundreds of tourists pass through the city daily. Even though I am a long-term resident of Japan and do not consider myself different or require special assistance in day to day life, I am

constantly offered help. Most people in the city want to answer in English even when I ask a question in Japanese. Often I am commended on what a good Japanese speaker I am or my neighbors praise me for putting out the garbage in the correct manner.

Often the comment is an ice-breaker, a way to start a conversation but at times it seems patronizing. Many tend to slow down or use simple words just like they would when they speak to young children. The topic of conversation with a person on the street or with a teacher from another school varies but usually boils down to why I live in Japan and when I plan to leave. There was a time when I would avoid the question and not answer when asked about my date of departure. But, one of the proudest days for me was the day I got my permanent resident permit from the Ministry of Justice. I needed that piece of paper because I could proclaim that I belong here and am going to live here forever. Many Japanese are surprised when I say that I plan to live here for good.

Japan has allowed foreigners to come and live in the country, albeit hesitantly, but has so far done little to institute long-term policies which can help foreigners make Japan their home. Compared with most developed countries and some developing countries as well, Japanese immigration policies seem archaic and out of tune with its global position as the world's second largest economy. As the population ages and there are fewer people to pay taxes the government will either have to increase taxes or increase immigrants into the country. In 2006, a government report recommended that more foreigners be permitted into the country but required that foreign population not be more than 3 percent. As the foreign population in Japan is already 2 percent, an increase of 1 percent is not a huge leap.

June 20th is recognized as World Refugee Day by the United Nations. Sudanese, Iraqi, and Afghan refugees are combing the globe for a safe place to call home. Developing countries like Pakistan, Iran and Kenya are taking hundreds of thousands of refugees. I was amazed

to hear that Sweden took over 9000 refugees last year and over a hundred thousand refugees in the past 20 years from Iraq alone. In a news piece on CNN, the Swedish Immigration Minister lamented that they should do more for the refugees and the world needs to act sooner rather than later. But alas, Japan accepted less than fifty refugees last year, a majority of them from Burma. Tokyo gives millions of dollars in aid to United Nation High Commissioner for Refugees (UNHCR) but refuses to accept refugees perhaps believing that an influx will destroy the intricate fabric of Japanese society. Some claim that Japan would be too different for refugees to live in but I am sure that Sweden is equally alien to most Iraqis. Japan should permit as many refugees it can, solely for humanitarian reasons.

I am afraid to even consider what Japan would do if a large number of North Koreans or Chinese reached Japanese shores. Would Japan be willing to give them asylum? I am not sure how the bureaucrats in Tokyo would react but I can say with confidence that there would be an outpour of support from ordinary Japanese people. We who live in Japan need to imagine the unimaginable as well. Japan constantly has earthquakes and faces threats from volcanoes. If a great natural calamity were to happen in this country, wouldn't we hope that the international community would assist and take us in, if necessary?

For the longest time Japan gave out thousands of visas each year for entertainers and stopped the practice only after many nations condemned the policy. Many believed that an entertainment visa was just a front for young Asian women to work in Japanese bars and brothels. Even now Japan is contemplating whether to let nurses in from certain Asian countries but for only a limited period of time. If they are needed in this country, shouldn't Japan entice them with full pension benefits and permanent resident visas after a few years? It is incomprehensible that Japan can bring in foreigners when it suits its national interest and simply ask them to leave when they are no longer useful.

Japanese laws and rules still do not treat foreign residents and Japanese alike. As a tax payer and an educator I was horrified to learn that if a child of a non-Japanese citizen refuses to go to elementary or junior high school, the school or the homeroom teacher does not need to visit the child's home whereas a home-visit would be required if the child were Japanese. Many foreigners pay into the pension fund through work but can receive compensation only if they work in Japan for at least 25 years. Otherwise when they leave the country, they are given a lump sum of a measly two hundred thousand yen. Unless government policies are broadly changed Japan will find it difficult to attract the best minds from around the world and it will only get low-skilled workers who will do the dirty, dangerous and difficult jobs which most Japanese are unwilling to do.

Japan and Japanese culture is already influenced by foreign products, foods, lifestyles, and languages. Even tiny towns and cities have Indian, Italian and Chinese restaurants. Shops sell a variety of foods from many countries and there is bound to be an English language school in even the smallest of towns. Japanese language is changing thanks to newspapers and TV journalists. More foreign words are added daily and some worry that Japanese language is being adulterated. How can so many Japanese want to learn foreign languages yet not want more people from those countries to live among them?

My concern and sometimes complaints of being treated in a "special" way do not fall on deaf ears and are keenly observed by my Japanese friends. Often when I go to a restaurant with them, the waiter immediately looks at my companions to receive my order even though I am speaking in Japanese with my friends. Most Japanese do not understand the plight of foreigners in this country. The media usually focuses on sensational stories which either portray foreigners as illegal aliens, drug dealers, celebrities or rude, childish individuals not in touch with Japanese manners. When I discuss such matters with friends, they often sympathize with me or

apologize to me. Good friends often tell me that I need to be patient and that Japan is changing. They believe that I must take the initiative to bring about change in Japan slowly – even if the process changes one person at a time.

Though I do not have any blood ties to this country, I have bonded with people who are just like my family. I lived in Mie for over a decade and even though now I live in Hiroshima, I have a sense of community and a sense that I belong to a place in Japan. To belong to a place means to have strong ties with people and I am glad that I have been able to develop long-lasting friendships. To assimilate and integrate in a society, to be accepted by a group is everyone's dream and hope, native or foreign.

Teaching gives me the opportunity to influence young minds. My students are teenagers whose minds are not prejudiced. They have not been molded to feel and think in a certain way and do not have preconceived stereotypes. I try to spend as much time as I can with them. I want them to learn and recognize that foreigners are just like them. We might look different or have different skin color but at the end we all have the same hopes and dreams in life. A few months ago, my students asked me whether I will become a Japanese citizen. I did not answer clearly but I explained to them that if I decided to change my nationality, I would have to write my name in Chinese characters. Much to my amazement, many of them took it upon themselves to help me choose good Chinese characters for my name. Such interactions with young minds give me hope. It validates that my presence in Japan is not a waste; instead my presence in Japanese society is necessary and will bring about a change in the future generations.

What keeps me in Japan is a very difficult question to answer. Of course, teaching is truly fulfilling but I could teach in other countries as well. I could respond that I stay because I enjoy playing *taiko drums*, tea ceremony or hiking in the mountains. Also, as a practicing Buddhist, I have unlimited opportunities to visit temples

and learn more about my faith. But, I guess the easiest answer and something which is closest to my heart is that Japan and the Japanese have changed me. In Japan I have always felt welcomed. People have been there to assist me even during difficult times. Not just my Japanese friends and neighbors but total strangers have gone out of their way to help me. Japan has taught me that each and every human life is precious and has given me a purpose in life. Simply put, the purpose of my life is to teach and at the same time learn about the rich culture of Japan.

For the longest time in response to why I live in Japan, I quoted the renowned writer, Mr. Donald Richie and a paragraph from his book, *The Inland Sea*.

“Japan –allows me to like myself because it agrees with me and I with it. Moreover, it allows me to keep my freedom. It makes very few demands on me – I am considered too much the outsider for that, a distinction I owe to the color of my skin, eyes and hair – and consequently, I become free. I become a one-member society, consistent only to myself and forever different from those who surround me. Our basic agreement permits an amount of approval, some of it mutual; our basic differences allow me to comprehend finally that the only true responsibility a man has is toward himself”.

Even though I understand Mr. Richie’s views, I do not anymore agree with his point of view. I am not considered an outsider in the circle of my Japanese friends. I am one of them and even if the color of my skin and eyes are different I am a part of them. They celebrate my “*gaijin-ness*”. I have been lucky. I know that Japan is my home but I am also sure that are many like me all over the world who would like to come and experience how truly blessed this country is and make Japan their home as well. Whenever I go overseas I feel like a quasi-ambassador of Japan. I always praise Japan and explain to people what a wonderful place I live in.

Most people respond that they would really like to visit the land of the rising sun.

One of my favorite Japanese Haiku poets is the 17th century born, Matsuo Basho. He wrote:

*An ancient pond
A frog jumps in
the sound of water.*

My interpretation of the Haiku is unique. More and more foreigners are calling Japan their home. Perhaps we foreigners are the frogs jumping into the old pond of Japan. We are making a lot of sound and splash. Japan is no longer an impregnable fortress which does not allow foreigners. Although the door to Japan has been opened how wide is yet to be answered. Foreigners like me, want to play an active role in Japan’s future development but whether we can become a part of the Japanese mosaic will depend on how open the government and the people of Japan are in accepting foreigners in their midst. In December 2002 Sadako Ogata, the former UNHCR commissioner said, “Japanese have been embracing an idea that Japan is a racially homogenous country, but it is just an illusion. It will not be possible to maintain such an idea in today’s globalized world where people, goods and information flows across national borders. We have to abandon our own insularism, discard prejudices and discrimination against foreigners, and recognize the world problems as our own.”

Japan is not xenophobic. It just lacks the experience of dealing with people who don’t look like the majority of its residents and have different customs. Various customs will only enrich Japan and the idea that more foreigners would lead to the loss of Japanese identity is misguided. Japan has always taken ideas from overseas and molded them so that they blend well with Japanese tastes and esthetics but now it is time to accept people as well. A multicultural Japan will be livelier and more vibrant and I want to be a national of that Japan.

当協会の運営を支えてくださっている団体・個人の方々

◆法人維持会員（一口50,000円/年）

(財)池坊華道会 オムロン株式会社 京都外国語大学
 (株)京都銀行 (株)京都新聞社 京都信用金庫
 京セラ株式会社 月桂冠株式会社 (財)今日庵
 サントリー株式会社 (株)松栄堂 (株)淡交社
 (財)不審菴 佛教大学
 ガリオア・フルブライト京滋同窓会
 村田機械株式会社 (株)ワコールホールディング
 (敬称略・順不同)

◆個人維持会員（一口30,000円/年）

猪野 愈 梅原 猛 北川善太郎
 児玉 実英 玉村 文郎 西島 安則
 森 金次郎
 (敬称略・順不同)

◆一般会員（一口5,000円/年）

原田 厚子 加藤 久雄 西澤 典子 伊藤 禎彦
 平竹 紋子 白銀真理子 林 由美 細井 則孝
 柿原 久美 菊本 美栄 糸井 通浩 畑 肇
 鶴屋 吉信 南 恵美子 大倉美和子 松本 健二
 柚田 陽子 長谷川 彰 シュペネマン・クラウド
 横山 俊夫 京都国際会館
 田附 房子 西尾 節子 川島 良治 井上 章子
 水谷 幸正 山本 壮太 大北 一雄 林 正
 大南 正瑛 千 玄 室 浅野 敏彦 山本 祥子
 中村 皓一 嶋本 幸治 辻 加代子 金剛 永謹
 日高 敏隆 佐々木松子 田村 武 荒木不二洋
 竹澤 雅子 海田 能宏 名和 又介 小林 哲也
 中島 千恵 富士谷あつ子
 講座受講生、日本語教師、スタッフ
 (敬称略・順不同)

◆協力者

浅野 愛子 三宅乃里子 田中 里枝
 藤田 榮一 片山 和子 井上 栄子
 石田 紀郎 二股 茂 安間てう子
 川口 珠生 清水 宏美 (敬称略・順不同)

◆特別プログラム後援

京都府 96万円 (国際交流講座・国際文化講座・エッセーコンテスト)
 京都市 37.4万円 (国際交流講座)
 千玄室 100万円 (外国人留学生交流プログラム)

編集後記

第29回オリンピック北京大会の開催月に、34号がようやく完成いたしました。感謝を込めて、一年のご報告を申し上げます。協会事業は会員の皆様や先生方、関係各位からご指導、ご鞭撻を賜り、それぞれ内容を改めながら回を重ねております。また、時に新しい課題へ挑戦もいたします。7-8頁でご紹介しています。
 ご意見、ご感想をお待ちしております。

Dear Readers,

We are a non-profit organization working for a better communication between the Kyoto citizens and visitors from abroad. For further information, please call our office:

TEL. 075-751-8958 FAX. 075-751-9006

E-mail office@kicainc.jp

URL http://kicainc.jp/

Kyoto International Cultural Association, Inc.

Rm116 Kyodai Kaikan

15-9 Yoshida Kawahara-cho

Sakyo, Kyoto, 606-8305 Japan

本誌には再生紙を使用しています。

Our NEWSLETTER is printed on recycled paper.